

2019年イギリス最後？の欧州議会選挙： European Election Study 2019 データを読む

成 廣 孝

目次

はじめに

1. 記述統計

1.1 デモグラフィック変数

1.2 2019年欧州議会選挙にかかわる変数

2. 分析

2.1 ジェンダー

2.2 年齢

2.3 政党支持と投票

2.4 投票選択

おわりに

はじめに

本稿は、2019年5月に実施された欧州議会選に際して実施された2019年欧州議会選挙調査（European Election Study 2019）の有権者調査データ（voter survey data）の先行公開バージョン（early release）を用いて、この選挙——これは、イギリスにとって最後の欧州議会選挙になるかもしれない——にあらわれた、イギリス政治の現在地を把握しようとする試みの一端である。これに近い時期を扱ったデータとしては、イギリス選挙調査 British Election Study 2014-19のパネル第16波（Wave 16 of the 2014-2019 British Election Study Internet Panel）が実施されており、本稿に続いてこのデータも分析して、比較検討をしたいと考えている。それは措くとして、本稿の執筆は丁度、ボリス・ジョンソン首相 Boris Johnson が企図した2019年12月総選挙が実施

され(12月12~13日),保守党の単独過半数議席獲得との結果が判明しつつあり,日本時間の12月13日現在イギリスの新聞やテレビ局のウェブサイトで報じられている結果からすれば,おそらくはやつとのことで2020年初にもEU離脱に漕ぎ着けられるだろうかという,しかしながらスコットランドやアルスターの分離に向けた動向,そして単一市場を離れたイギリス経済の行方など,未だ先行き不透明な時期においてなされている。

近年, R および R Studio を用いたデータ分析において, RMarkdown や tidyverse を用いた dynamic かつ reproducible なドキュメント作成アプローチが流行している。著者が長年使用している Stata でも, dynamic documentation に向けた環境整備が開始されていることから, 本稿はこれを用いて原稿を作成することに習熟するという目的を兼ねている。Stata における dynamic documentation については, 現行バージョンの16で強化されたことからまだ未熟な部分も多く, またユーザーサイドで書かれた ado ファイルやスクリプトに依存する部分もあるうえ, pandoc など外部環境に依存する部分もあることから, 全ての図表の出力に関して完璧に統一された体裁をとることができなかつた。この点について使用したコマンドや手順を記しておきたい。執筆の大枠は, putdocx を用いて Stata の do ファイルからベースの Microsoft Word ファイルを作成し, そこに Stata の命令によって生成された table や figure を埋め込むという方法をとっている。dyndoc を用いるほうが本筋なのだと思うのだが, あるいは markstat を用いるほうがいいのであろうが, pandoc の挙動が不安定なこと, LaTeX を pdfTeX から PDF に変換する際に日本語が通らないこと, 原稿提出に Microsoft Word ファイル形式を採らなければならないことから, 審美的に満足いかない部分があるものの, さしあたりエラーが出にくいこの方法をとった。今回の方法でも, dynamic documentation をうたうだけあって, 元データのハンドリングから図表の作成までが, Stata における一回の do ファイルの実行によって再現される。図表はその都度生成されることから, Stata の出力を Excel などの他アプリケーションを介して図表を作り直して保存したうえ, Word や LaTeX などの文書ファイルに貼り

直す、といったこれまでは避けられなかった大変面倒かつ誤りの生じやすい手順を経ずに済ませることができる。ただし、この方法で docx ファイルを出力するにあたっては、table などが出版レベルのクオリティにないといった問題が残る。この点を補うために Stata の tabout パッケージや asdoc パッケージを用いている。ただし、この出力は別の docx ファイルや xlsx ファイルになされるため、これをベースファイルのなかにカット&ペーストしたり、include したりしている。このプロセスは dynamic かつ reproducible なものとはいえない。さらに、putdocx table 命令や tabout によってカバーできないコマンド、特に表の column 数が多いものについては、asdoc パッケージを用いて docx ファイルに出力したのち貼り付けたり、dyndoc から html 化したものを画像化して回転のうえ、画像としてベースの docx に貼り付けるといふ、これもまた dynamic で reproducible というにはさらに程遠い方法と云わざるをえまい。さしあたり現在の著者の能力の限界であり、今後精進したい点である。

1. 記述統計

1.1 デモグラフィック変数

残念ながら、スコットランド・ブロックのサンプルが90しかないため、スコットランド地域の EU や Brexit に対する態度をこのデータから調べることは難しい。また、スコットランドからは6議席中3議席を SNP (地域内得票率37.8%) が、残り3つを Brexit (14.8%), 自由民主 (13.9%), 保守 (11.6%) で分け合っている (労働党は2議席減でゼロ, 9.3%) が、

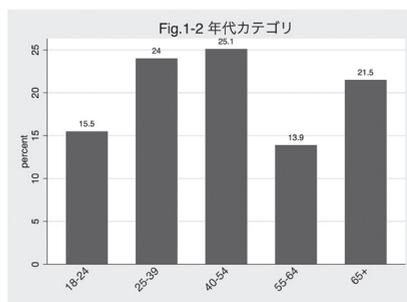
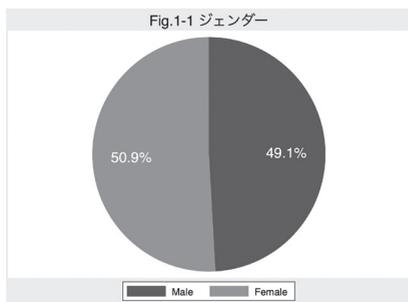
Tab. 1-1 回答者の投票ブロック

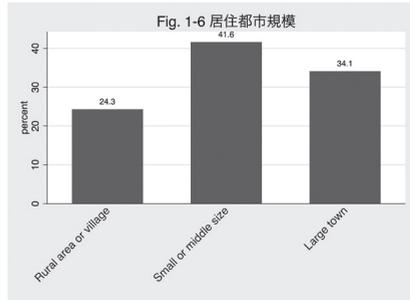
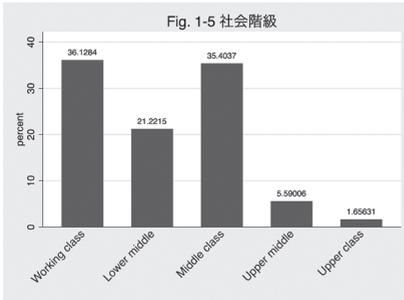
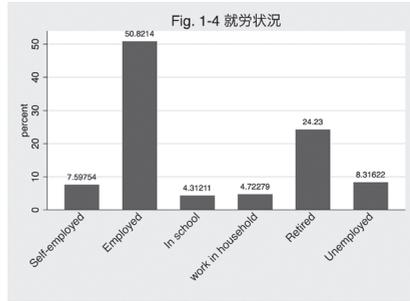
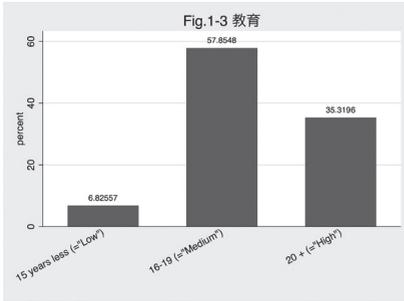
	No.
North East	42.0
North West	102.0
Yorkshire and The Humber	84.0
East Midlands	68.0
West Midlands	79.0
East of England	96.0
London	134.0
South East	145.0
South West	89.0
Wales	49.0
Scotland	90.0
Northern Ireland	22.0
Total	1,000.0

政党支持によるスコットランド内部の違いなども当然ながら検討することができない。

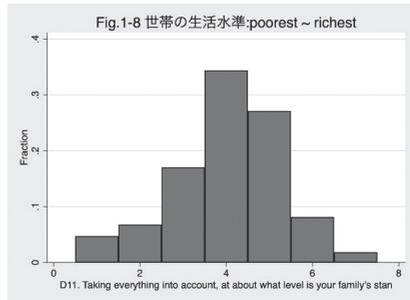
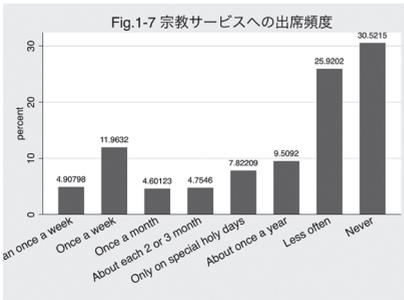
Tab. 1-2 ジェンダー, 年齢, 教育の頻度表

	Freq.	Col %	Sample.
D3. Are you...			
Male	491	49.1	491
Female	509	50.9	509
Total	1,000	100.0	1,000
HAGE. Age recode			
18-24	155	15.5	155
25-39	240	24.0	240
40-54	251	25.1	251
55-64	139	13.9	139
65+	215	21.5	215
Total	1,000	100.0	1,000
Education (LEVEL, Age of End of + Panel)			
15 years less (= "Low")	63	6.8	63
16-19 (= "Medium")	534	57.9	534
20+ (= "High")	326	35.3	326
Total	923	100.0	923

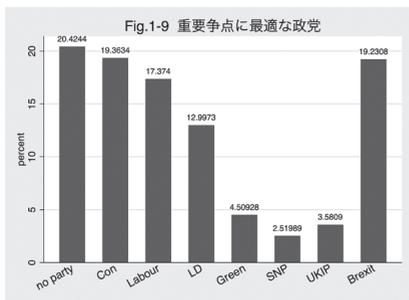




本人が労働組合員、あるいは家族の誰かが労働組合員という世帯は23.1%に留まる (Fig.4)。



1.2 2019年欧州議会選挙にかかわる変数

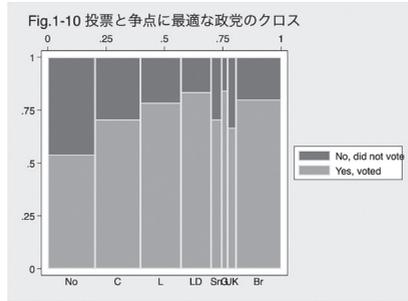


今回の選挙と関係する質問項目として、まず、Fig.1-9には、回答者が挙げるイギリスが直面している最も重要な争点（自由回答）につき、「最も適切に解決しうる政党」が挙げられている。挙げられた争点がかについては、自由回答がカテゴリ

にまとめられているわけではなく、煩瑣になるためここでは触れられない。そして、下の Tab.1-5 は、Q6においてこの欧州議会選挙で「投票した」と回答した者のなかでのQ2「最適政党」の度数分布表である。実際の得票率と比較すると、保守党(19% vs 実現値12.1%) および労働党 (18.82% vs 14.1%) では実現値よりも大きく、自由民主 (14.92% vs 20.3%), Brexit 党 (21.4% vs 31.6%) では実現値のほうが大きい。現実的に考えれば、イギリスの政権を獲得して重要争点に対処しうるのは二大政党のいずれか、ということであろうか。その spineplot (Fig.1-10) も同様の傾向を示している。

Tab.1-5 棄権者における最適政党

Q2. Which political party do you think would be best at dealing with this proble	Frequency	Percentage (%)	Cum. (%)
no party	82	15.13	15.13
Con	103	19.00	34.13
Labour	102	18.82	52.95
LD	81	14.94	67.90
Green	24	4.43	72.32
SNP	16	2.95	75.28
UKIP	18	3.32	78.60
Brexit	116	21.40	100.00
Total:	542	100	

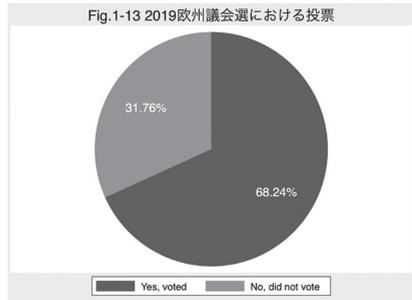
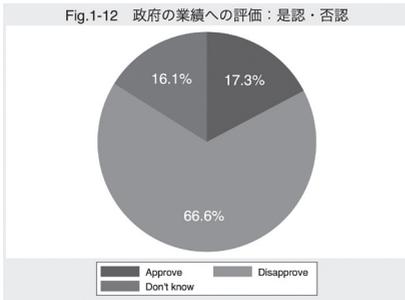
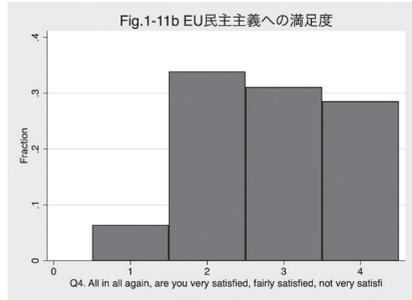
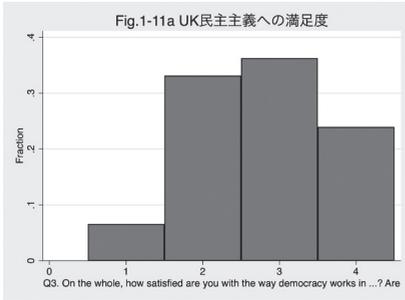


Tab. 1 - 6: 投票と最適政党

Q2. Best Party	Q6. Yes,	Did voted	you No,	vote did	2019 not	EE? vote
Con		82	109.845		70	42.155
			-5.65			5.65
Labour		103	105.509		43	40.491
			-0.517			0.517
LD		102	93.947		28	36.053
			1.735			-1.735
Green		81	70.099		16	26.901
			2.65			-2.65
SNP		24	24.571		10	9.429
			-0.224			0.224
UKIP		16	13.731		3	5.269
			1.178			-1.178
Brexit		18	19.512		9	7.488
			-0.662			0.662
Change		116	104.787		29	40.213
			2.316			-2.316

Pearson $\chi^2(7) = 40.4187$ Pr = 0.000
 likelihood-ratio $\chi^2(7) = 39.2732$ Pr = 0.000

下の Fig. 1-11a, 1-11b はイギリス (Q3) および EU (Q4) の民主主義への満足度を4段階で答えさせたものである。両者に大きな差はみられない。対応のある t 検定でも、Q3 と Q4 の平均の有意差を見出すことができなかった。



投票日における投票参加・棄権を問う Q6 に対する回答 (Fig. 1-13) では、66.6%が投票した (N=1,000)、ということになっている。すなわち投票率66.6%であるが、これは公表されている公式の数字 (36.7%) から著しく乖離しており、文字通りにとることはできない。公式の投票率は前回2014年の35.4%から僅かに上昇しているとはいえ、50.88%と、初めて半数を超えた全加盟国の平均と比べると、やはり低いのである。ただし、これまでと大きな差がないことからみて、「離脱するので無駄」という意識は特に働かなかったようである。さりとて、Tab. 1-8 に示されたサンプルのうち投票をしたと答えた66.6%における各党の得票率を、下院のブリーフィング・ペーパー (CBP-8600) で公表されている公式の数字と比べてみてもさほどの乖離はみ

られないことから、どれかの党に「投票した」と答えた中で偏りがあると判断できるだけのエヴィデンスもないので、各党に投票したと答えている中に同程度の割合である程度の虚偽が含まれていると考えるしかないであろう。

Q7 「2019年欧州議会選挙で投票した政党」の度数分布表は上の Tab.1-7 の通りである。全サンプルから計算すると100%に「投票せず」(did not vote) が含まれるので、これを除いた各党の得票率を計算しなおし、下院の Briefing Paper No. 8600 に記載されている公式の数字と突き合わせたものが Tab.1-8 である。労働党票において他よりやや大きめの乖離がみられるが、このデータは投票政党の回顧という点では概ね実態を反映しているものと考えられる。もちろん少政党に投票したサンプルは小さいので、これらについて信頼性の高い分析はできないことを弁えておく必要がある。敢えてこの表には記載しないが、ドント式比例代表制が使用されているので、議席率はある程度得票率に近似する。

Tab. 1-7 2019年欧州議会選挙で投票した政党

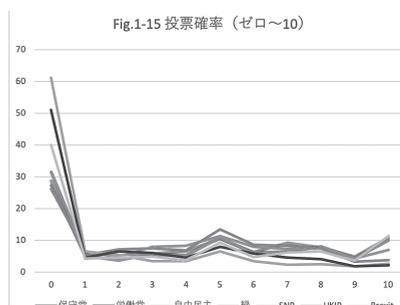
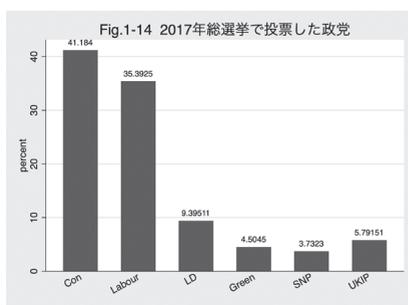
	No.
Con	76
Labour	123
LD	126
Green	45
SNP	25
UKIP	17
Brexit	190
Total	602

Tab. 1-8 2019年欧州議会選挙における得票率：EES19サンプルと実現値

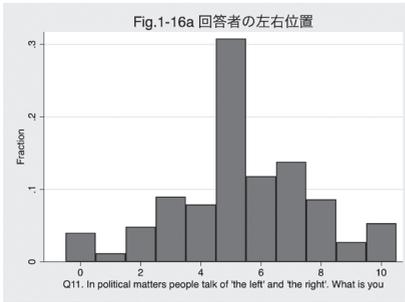
Party	サンプルにおける頻度	サンプルにおける割合	サンプルにおける得票率	BP3800における公表値
Brexit	190	19	31.25	31.6
Liberal Democrats	126	12.6	20.72	20.3
Labour	123	12.3	20.2	14.1
Conservative	76	7.6	12.5	12.1
Green	45	4.5	7.4	9.1
SNP	25	2.5	4.1	3.6
UKIP	17	1.7	2.8	1.0
did not vote	334	33.4		

Tab. 1-9 2017年下院総選挙で投票した政党

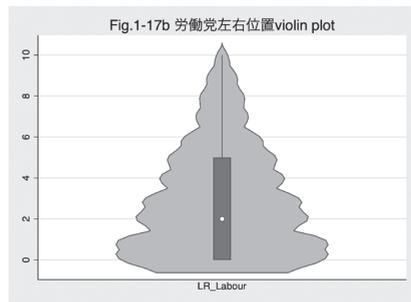
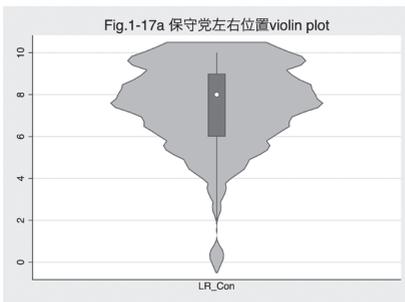
Q9. Which party did you vote for at the ... ?	Frequency	Percentage (%)	Cum. (%)
Con	320	41.18	41.18
Labour	275	35.39	76.58
LD	73	9.40	85.97
Green	35	4.50	90.48
SNP	29	3.73	94.21
UKIP	45	5.79	100.00
Total:	777	100	

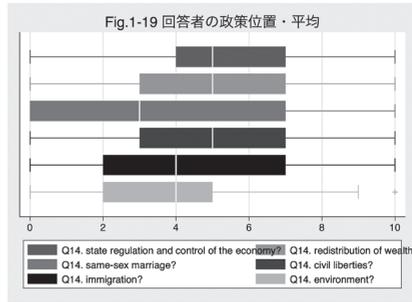
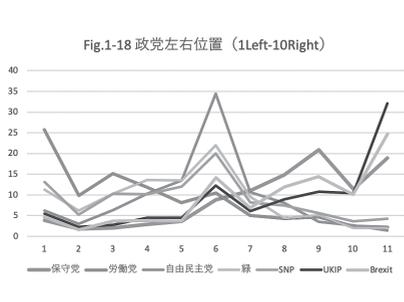
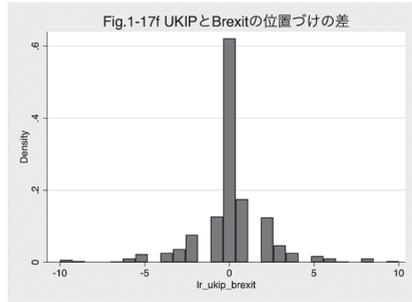
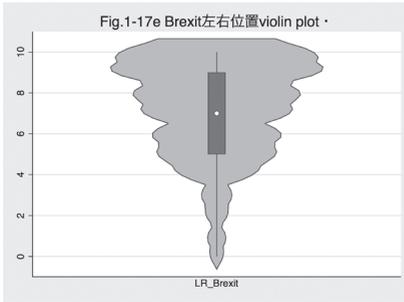
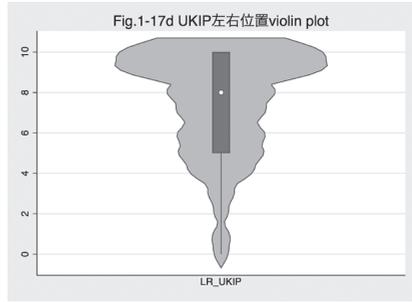
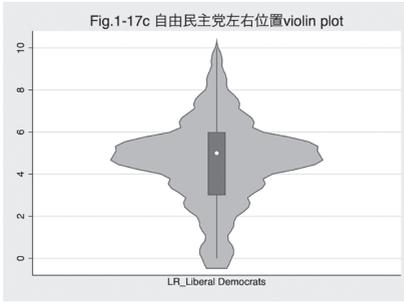


項目 Q10は、それぞれの政党にどれくらい投票したいか・しそうかを問うているが、各政党に対する好み・評価を示しているものと考えられよう。Fig. 1-12にみるように、当然ながら自分が実際に投票しようと思っている・投票した政党以外の政党には、0すなわち not at all probable と答えるのであろう、どの政党も0が最も多くなっている。その中でいくらか違いが読み取れるとすれば、SNPに突出して0が多い。もちろんスコットランド・ブロック以外に候補者がいないためであろう。次いでこの時点で分裂し、任期の高い前党首 Farage を失っていた UKIP、分裂後の Brexit は未だ得体が知れず、これらの政党に強いコミットメントをしている回答者以外は評価が低くなるだろう。緑は拒否反応が弱いのだろうか、中位程度で高めになっており、ただし議席数が小さく（なることが予想され）、影響力に疑問がともなうのであろう、高い評価は得られていない。



回答者の左右スケール上（左0から右10までの11点尺度）における自己の位置づけ、および各政党の位置づけの分布をみるために、ヒストグラム (Fig. 1-16a) とカーネル密度推計による violin plot (Fig. 1-16a, 1-17a~e)。各政党の位置づけの分布を重ね合わせた折れ線グラフ (Fig. 1-18) を示した。回答者（有権者）の分布はやや右（上）に厚い。自由民主党ははっきりと中道に、二大政党と UKIP と Brexit の二党ははっきりと左右両端寄りに位置づけられている (Fig. 1-17a, 1-17b, 1-17c)。UKIP のほうが Brexit よりもより右端が厚くなっており (Fig. 1-17d, 1-17e. Fig. 1-18でもみてとれる), そのぶん平均値も UKIP のほうが大きくなっているようにみえるが, UKIP の位置づけから Brexit の位置づけを減じたもののヒストグラムが Fig. 1-17f であるが, 平均は .1248391, 標準誤差 .0792711 であることから, 統計的には差がない (0 でない) ことを否定できない。





回答者に6つの政策に関する賛否を0から10までの11点で尋ねた Q14_1 から Q14_6 に因子分析をかけると、固有値が1を超える因子は1つ (Tab. 1 -10a) なので、1因子構造と考えられる。Q14_5の因子負荷量が小さいが (.0550)、他はQ14_4の.4719を底に.5を超える。Q14_5を除いた残りの変数のクロンバックのアルファ (信頼性係数)の値は.6896となり、変数が5つであることを考えれば、そこそこ、といったところであろう。因子スコア f2をとって以後の分析に使用する。

Tab. 1 -10a : Q14の因子分析

(obs = 779)

Factor analysis/correlation Number of obs = 779
 Method: principal factors Retained factors = 3
 Rotation: (unrotated) Number of params = 15

Factor	Eigenvalue	Difference	Proportion	Cumulative
Factor1	1.609	1.424	1.238	1.238
Factor2	0.184	0.164	0.142	1.380
Factor3	0.020	0.147	0.016	1.396
Factor4	-0.127	0.049	-0.097	1.298
Factor5	-0.175	0.037	-0.135	1.163
Factor6	-0.212	.	-0.163	1.000

LR test: independent vs. saturated: chi2(15) = 693.19 Prob > chi2 = 0.0000
 Factor loadings (pattern matrix) and unique variances

Variable	Factor1	Factor2	Factor3	Uniqueness
Q14_1	0.583	0.175	-0.050	0.627
Q14_2	0.625	0.024	-0.078	0.603
Q14_3	0.542	-0.137	0.070	0.683
Q14_4	0.472	-0.225	0.005	0.727
Q14_5	0.055	0.278	0.060	0.916
Q14_6	0.599	0.080	0.057	0.632

Tab. 1 -10b : 政党支持ごとの因子スコアの多重比較

Pairwise comparisons of means with equal variances

over : vparty
 Number of
 Comparisons

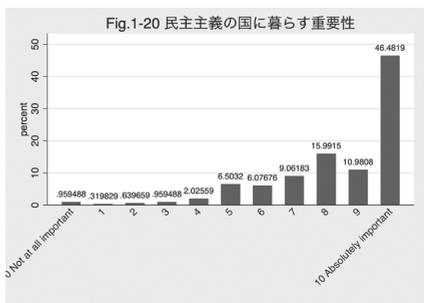
vparty 28
 Scheffé

	f2	Contrast	Std.Err.	t	P > t	[95%_Conf	Interval]
vparty							
Con_vs_Abstain	.3494007	.1099497	3.18	0.185	-.0642749	.7630763	
Labour_vs_Abstain	.0085597	.093496	0.09	1.000	-.3432102	.3603296	
LD_vs_Abstain	-.0575685	.0941262	-0.61	1.000	-.4117094	.2965725	
Green_vs_Abstain	-.492564	.1392576	-3.54	0.087	-1.016508	.0313797	
SNP_vs_Abstain	.3204524	.1921937	1.67	0.904	-.4026586	1.043563	
UKIP_vs_Abstain	.9112511	.203001	4.49	0.006	.1474785	1.675024	
Brexit_vs_Abstain	.2935221	.0803316	3.65	0.066	-.008718	.5957623	

f2	Contrast	Std.Err.	t	P > t	[95%_Conf	Interval]
Labour_vs_Con	-.340841	.1236514	-2.76	0.371	-.806068	.1243859
LD_vs_Con	-.4069692	.1241286	-3.28	0.152	-.8739915	.0600532
Green_vs_Con	-.8419647	.1610616	-5.23	0.000	-1.447944	-.2359853
SNP_vs_Con	-.0289483	.2085344	-0.14	1.000	-.8135396	.755643
UKIP_vs_Con	.5618504	.2185351	2.57	0.471	-.2603677	1.384069
Brexit_vs_Con	-.0558786	.1140234	-0.49	1.000	-.4848811	.3731239
LD_vs_Labour	-.0661281	.1098201	-0.60	1.000	-.4793163	.34706
Green_vs_Labour	-.5011237	.150311	-3.33	0.136	-1.066655	.0644076
SNP_vs_Labour	.3118927	.2003476	1.56	0.932	-.4418965	1.065682
UKIP_vs_Labour	.9026914	.2107372	4.28	0.011	.1098123	1.695571
Brexit_vs_Labour	.2849624	.0982542	2.90	0.299	-.08471	.6546349
Green_vs_LD	-.4349955	.1507038	-2.89	0.306	-1.002005	.1320136
SNP_vs_LD	.3780209	.2006424	1.88	0.830	-.3768777	1.132919
UKIP_vs_LD	.9688196	.2110175	4.59	0.004	.1748857	1.762753
Brexit_vs_LD	.3510906	.0988541	3.55	0.084	-.0208389	.72302
SNP_vs_Green	.8130164	.2253671	3.61	0.074	-.0349064	1.660939
UKIP_vs_Green	1.403815	.2346515	5.98	0.000	.5209605	2.28667
Brexit_vs_Green	.7860861	.1424959	5.52	0.000	.2499586	1.322214
UKIP_vs_SNP	.5907987	.269457	2.19	0.683	-.4230083	1.604606
Brexit_vs_SNP	-.0269303	.1945529	-0.14	1.000	-.7589174	.7050569
Brexit_vs_UKIP	-.617729	.205236	-3.01	0.250	-1.389911	.1544525

Scheffé の方法による多重比較の結果 (Tab.1-10b) をみると、因子スコア f2 の値に優位な差がみられるのは、棄権 vs UKIP, 棄権 vs Brexit, 保守 vs 緑, 労働 vs UKIP ($p < .05$), 自由民主 vs UKIP, 緑 vs UKIP, 緑 vs Brexit, ということになる。離脱政党 UKIP や Brexit を支持する者の考え方は、基本的政策面で、既成政党とは異なるということだろうか。

Fig.1-20にみるように、民主主義への評価は非常に高い。政党支持 (partyi) で分けた平均 (Tab.1-11), 欧州統合への支持 (Q22a) で分けた平均 (Tab.1-12), とともに Scheffé の方法で多重比較を試みたが、前者ではいずれのカテゴリ間でも有意差が



検出されなかった。EU の民主主義（の赤字）についての評価と政党支持あるいは EU 残留・離脱がつながっているわけではないようである。EU への離脱やそれを強く主張する政党への支持は EU の民主主義の赤字が理由だという明白な証拠はない。後者では、EU に加盟していることを「良い」と考えている者と「悪い」と考えている者のあいだに有意差がみられず、「良いこと」と考えている者と「どちらでもない」のあいだ(-.9405)、「悪いこと」と考えている者と「どちらでもない」のあいだ(-1.1222) に有意な差がある。これは容易に判断を下すことが難しい。

Tab 1-11: 多重比較

Pairwise comparisons of means with equal variances

Q16	Contrast	Std.Err.	t	P > t	[95%_Conf	Interval]
partyi						
C_vs_No	.1721071	.2081565	0.83	0.998	-.6107301	.9549444
L_vs_No	-.5254237	.1982793	-2.65	0.427	-1.271114	.220267
LD_vs_No	.0721372	.2615247	0.28	1.000	-.9114074	1.055682
Sn_vs_No	-.5010335	.3451866	-1.45	0.953	-1.799215	.797148
G_vs_No	-.5994978	.4144785	-1.45	0.954	-2.158273	.9592773
UK_vs_No	-.5254237	.5123206	-1.03	0.994	-2.452164	1.401317
Br_vs_No	.2303902	.2569714	0.90	0.997	-.7360304	1.196811
L_vs_C	-.6975309	.2176484	-3.20	0.175	-1.516065	.1210036
LD_vs_C	-.0999699	.2764983	-0.36	1.000	-1.139828	.9398879
Sn_vs_C	-.6731406	.3566651	-1.89	0.828	-2.01449	.6682092
G_vs_C	-.7716049	.4240856	-1.82	0.855	-2.366511	.8233006
UK_vs_C	-.6975309	.5201236	-1.34	0.970	-2.653617	1.258555
Br_vs_C	.0582831	.2721956	0.21	1.000	-.965393	1.081959
LD_vs_L	.597561	.2691409	2.22	0.669	-.4146271	1.609749
Sn_vs_L	.0243902	.3509922	0.07	1.000	-1.295625	1.344405
G_vs_L	-.0740741	.4193258	-0.18	1.000	-1.651079	1.502931
UK_vs_L	2.78e-15	.51625	0.00	1.000	-1.941519	1.941519
Br_vs_L	.755814	.2647187	2.86	0.321	-.2397428	1.751371
Sn_vs_LD	-.5731707	.3902256	-1.47	0.950	-2.040735	.8943937
G_vs_LD	-.671635	.4526749	-1.48	0.948	-2.37406	1.03079
UK_vs_LD	-.597561	.5436861	-1.10	0.991	-2.642261	1.447139
Br_vs_LD	.158253	.3148912	0.50	1.000	-1.025993	1.342499
G_vs_Sn	-.0984643	.5056414	-0.19	1.000	-2.000086	1.803157

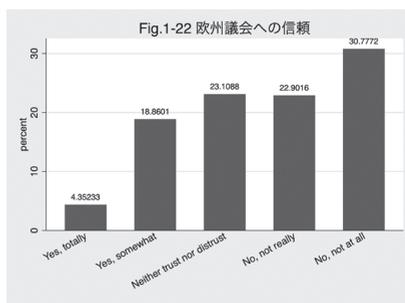
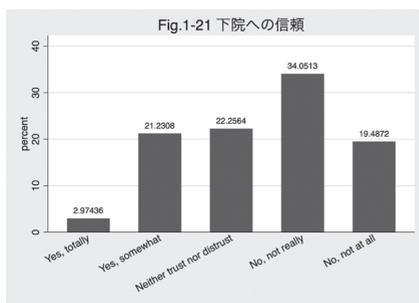
Q16	Contrast	Std.Err.	t	P > t	[95%_Conf	Interval]
UK_vs_Sn	-.0243902	.5885178	-0.04	1.000	-2.237694	2.188914
Br_vs_Sn	.7314237	.3871887	1.89	0.828	-.7247198	2.187567
UK_vs_G	.0740741	.631658	0.12	1.000	-2.301472	2.44962
Br_vs_G	.829888	.4500597	1.84	0.845	-.8627012	2.522477
Br_vs_UK	.755814	.5415106	1.40	0.962	-1.280705	2.792333

Tab.1-12 : 多重比較

Pairwise comparisons of means with equal variances

Q16	Contrast	Std.Err.	t	P > t	[95%_Conf	Interval]
Q22						
bad_vs_good	.1816799	.1448434	1.25	0.456	-.173455	.5368148
Neither_vs_good	-.9405332	.1983993	-4.74	0.000	-1.426979	-.4540871
Neither_vs_bad	-1.122213	.203321	-5.52	0.000	-1.620726	-.6236998

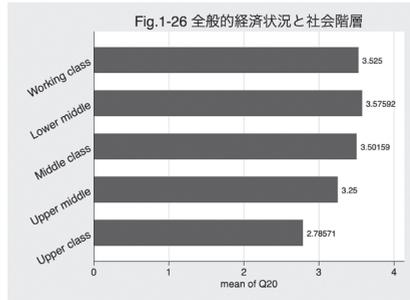
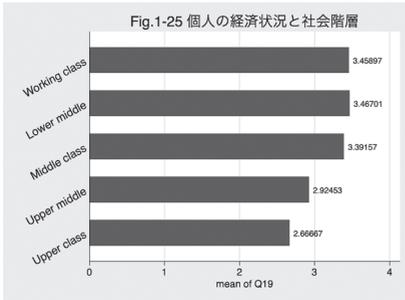
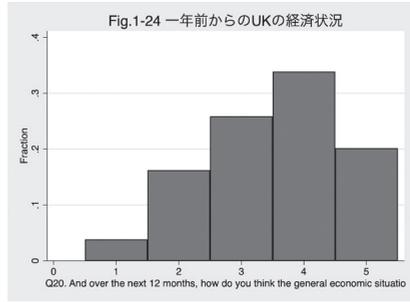
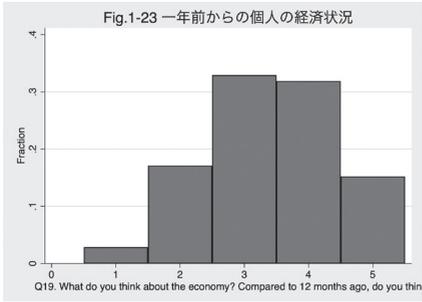
Tab. 1-13 : t 検定



下院への信頼 (Q18_1) と欧州議会への信頼 (Q18_2) の平均値を比較するために、対応のある t 検定を実施したところ ($t = -2.9655$, $d.f. = 961$, $p < .01$), 有意差が検出された (Tab.1-13)。いまとっては当然のことであるように思われるが、欧州議会への信頼は下院への信頼に劣っている。

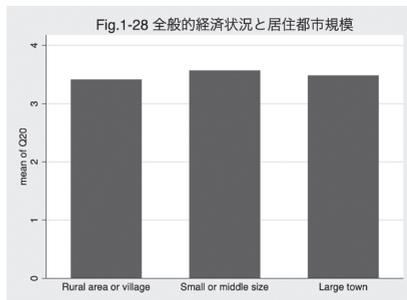
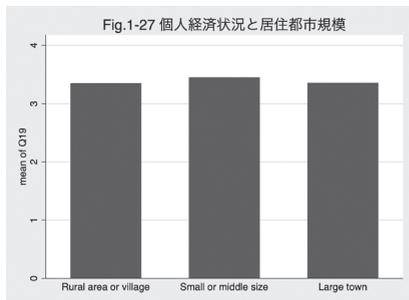
1年前と比較した個人的経済状況およびイギリス全体の経済状況の変化について体感を尋ねた Q19, Q20のヒストグラムを示した (Fig.1-23, 1-24)。総じてこの欧州議会選挙は、イギリス国民の多くが経済状況に不満を感じていた時期に行われた (「個人的に好転」19.96%に対し「悪化」47.1%, 「イギリス全体で好転」20.07%対「悪化」54.06%)。

Fig.1-25および Fig.1-26は、経済状況への体感を尋ねた項目の、社会階

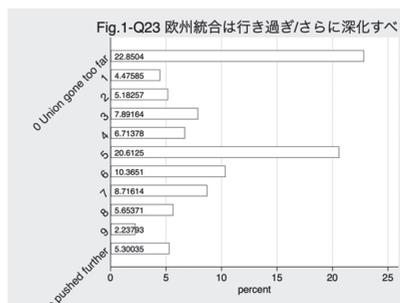


級ごとの平均値を示している。社会階級が上がるほど（グラフ右方向。「その他」のカテゴリは除く）、個人的にもイギリス全体に対しても、経済状況を楽観的にみているように見える。ただし、双方に対して Scheffé の方法で平均値の差の多重比較を行ったところ、個人的判断において、労働者 vs 上層ミドル、下層ミドル vs 上層ミドルとの差が有意となったが、イギリス全体への判断についてはこれらの社会階級カテゴリ間の有意差が検出されなかった（省略）。上下層ミドルクラスのサンプル数が多くなく、平均値の分散がやや大きくなっていることが原因の一つであると考えられる。また、下の Fig. 1-27 および Fig. 1-28 は、Q19 および Q20 につき、D 8、すなわち回答者の居住都市規模ごとに平均をとったものであるが、予想したほどには大都市とそれ以外の経済状況に対する判断の違いがみられなかった。ここでも Scheffé の方法による平均値の有意差の検定（多重比較）を行ったが、有意な差が検出されなかった（省略）。

欧州統合は行き過ぎているのか（1）、さらにすすめるべきなのか（10）を



問うた Q23について、全体的状況を Fig.1-Q23に示した。中間的・無関心な回答が多いのは世の常であるが、昨今のイギリスの状態からは当然であるが、「行き過ぎ」と答える割合が高くなっている。教育水準変数 EDU のカテゴリごとに平均値をとり、Scheffé の方法で多重比較を行ったところ (Tab.1-14a), 下層 (教育終了年齢15歳以下, 平均2.7170) と中層 (16~19歳以下, 平均3.806) の間 ($p < .05$), 下層と上層 (20歳以上, 4.57094) のあいだ ($p < .001$), 中層と上層とのあいだ ($p < .01$) に有意差がみられる。教育水準の高い方が、より統合を推進すべしと回答していることがわかる。



Tab. 1-14a

Pairwise comparisons of means with equal variances

Q23	Contrast	Std.Err.	t	P > t	[95%_Conf Interval]
EDU					
16-19_vs_15years_less	1.088888	.4366977	2.49	0.045	.0179301 2.159846
20_vs_15years_less	1.853965	.4481349	4.14	0.000	.7549583 2.952971
20_vs_16-19	.7650769	.225556	3.39	0.003	.2119231 1.318231

下の表 (Table.1-14b, Tab.1-15) は、EES2019データにおける全てのサンプルと、投票「しなかった」回答者が、「近い」と感じている政党の度数分布である。半ば当然ながら、「近いと思える政党なし」が44.53%を占め、

全回答者におけるよりかなり高い割合である。半数を超える棄権者のなかには、保守・労働二大政党の実際の得票率を超える割合で（特に後者）、これらの政党を「近い」と考える有権者が含まれていた。二大政党は、自由民主党（実現得票率20.3%）、Brexit（同31.6%）と比べれば、棄権者を投票に引き出せなかったペナルティを受けたのである。緑やSNPが実現値より少ない割合であることを考えると、欧州議会選挙において比例代表制が使用されていることで、いくらか中小政党支持者を投票に引き出す効果が生じているのかもしれない。

Tab. 1-14b. 政党支持

partyi	Frequency	Percentage (%)	Cum. (%)
No	260	29.68	29.68
C	165	18.84	48.52
L	195	22.26	70.78
LD	82	9.36	80.14
Sn	42	4.79	84.93
G	28	3.20	88.13
UK	17	1.94	90.07
Br	87	9.93	100.00
Total:	876	100	

Tab. 1-15 棄権者の政党支持

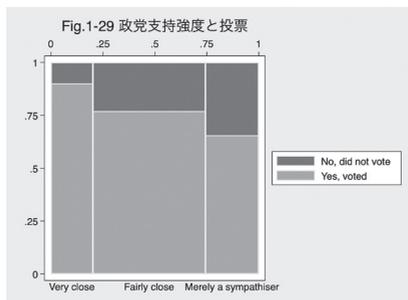
partyi	Frequency	Percentage (%)	Cum. (%)
No	118	44.53	44.53
C	43	16.23	60.75
L	56	21.13	81.89
LD	14	5.28	87.17
Sn	14	5.28	92.45
G	3	1.13	93.58
UK	6	2.26	95.85
Br	11	4.15	100.00
Total:	265	100	

Tab. 1-16 政党支持強度

Q26. Do you feel yourself to be very close to this party, fairly close or merely	Frequency	Percentage (%)	Cum. (%)
Very close	121	20.03	20.03
Fairly close	327	54.14	74.17
Merely a sympathiser	156	25.83	100.00
Total:	604	100	

Tab. 1-17 棄権者の政党支持強度

Q26. Do you feel yourself to be very close to this party, fairly close or merely	Frequency	Percentage (%)	Cum. (%)
Very close	12	8.57	8.57
Fairly close	75	53.57	62.14
Merely a sympathiser	53	37.86	100.00
Total:	140	100	

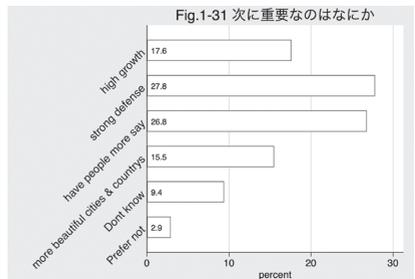
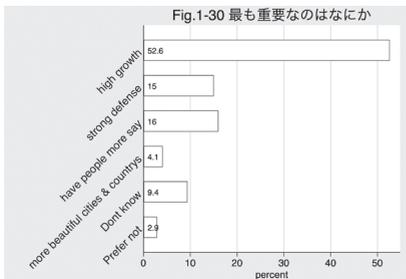


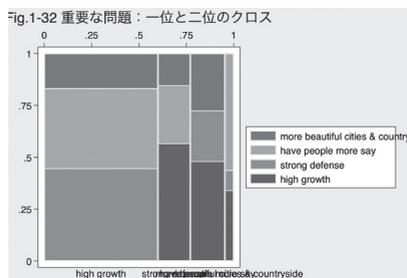
Tab. 1-18は、縦軸に政党への近さ（政党アイデンティフィケーションとみなす）を示す変数 $party_i$ 、横軸に投票した政党 $vparty$ をとったクロス表である。各セルは、観測値、期待値、調整済み残差からなる。調整済み残差が、有意水準 .05として絶対値が1.96を超えていれば、縦横の変数が独立である場合よりも有意に多い/少ないとみなすものとする。当然ながら「近い」政党同士のセルは大きな残差が得られ、その分残差の小さなセルから余分に支持を集めていることになる。「近い政党ナシ」は、労働・保守・Brexitの3党

Tab. 1-18 政党支持と投票政党のクロス表

partyi	did not vote	vparty						
		Conservative	Labour	Liberal Demc	Green	SNP	UKIP	Brexit
no party	123	12	14	34	12	4	3	39
	79.753	20.011	32.771	33.641	11.89	7.25	4.35	51.332
	7.026	-2.219	-4.187	0.079	0.039	-1.455	-0.775	-2.303
Conservative	43	53	1	7	2	0	3	52
	53.279	13.368	21.893	22.474	7.943	4.844	2.906	34.292
	-1.917	12.606	-5.35	-3.919	-2.409	-2.489	0.062	3.796
Labour	57	0	92	17	5	1	2	11
	61.221	15.361	25.156	25.824	9.128	5.566	3.339	39.404
	-0.748	-4.642	16.261	-2.123	-1.589	-2.229	-0.839	-5.785
Liberal Demc	16	0	1	58	4	0	1	0
	26.474	6.643	10.878	11.167	3.947	2.407	1.444	17.04
	-2.618	-2.831	-3.389	15.893	0.029	-1.657	-0.392	-4.895
Green	14	1	1	0	17	0	1	2
	11.913	2.989	4.895	5.025	1.776	1.083	0.65	7.668
	0.756	-1.228	-1.936	-2.471	11.978	-1.08	0.448	-2.359
SNP	4	2	0	0	0	19	0	1
	8.604	2.159	3.535	3.629	1.283	0.782	0.469	5.538
	-1.95	-0.115	-2.055	-2.087	-1.18	21.251	-0.702	-2.208
UKIP	6	1	2	0	0	0	5	3
	5.626	1.412	2.312	2.373	0.839	0.511	0.307	3.621
	0.195	-0.366	-0.223	-1.678	-0.949	-0.734	8.638	-0.372
Brexit	12	0	2	0	1	1	0	69
	28.129	7.058	11.558	11.865	4.194	2.557	1.534	18.105
	-3.924	-2.928	-3.192	-3.919	-1.688	-1.044	-1.319	14.231

から棄権に流れている。保守党支持者が保守党に多く投票しているのは当たり前として、Brexitにも多目に流れていることがわかる。本来は、あるいは国政に関わる限りでは保守党を支持していながら、EU離脱をめぐり混迷を深めている保守党から、同様にEUからの離脱を主張しているBrexitに流れたものであろう。一方、労働党・自由民主党・緑・SNP・Brexit党はまだしも自らに近い支持者の票を固めており、他党に奪われてはいない。この限りでは、ポピュリスト政党に支持者を奪われているのは保守党のみであり、労働党は少なくとも「近さ」を感じている支持者を失っていなかったことがわかる。





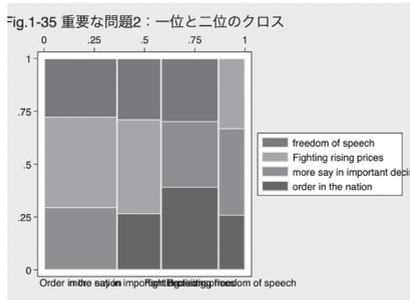
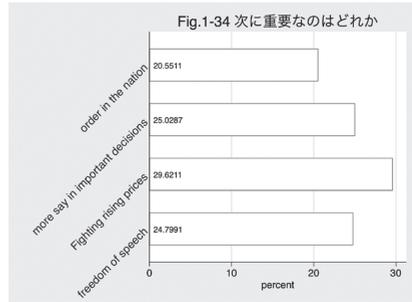
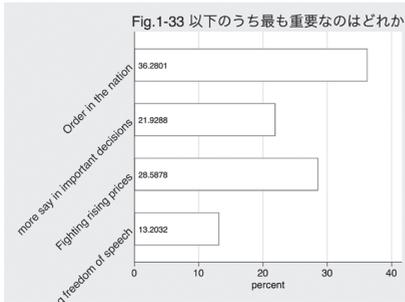
Tab. 1-20 : クロス表

Q32. the most important	Q32. high_growth	next strong_defense	most more_say	important? beautiful_landscape
high_growth	0	235	203	88
	105.560	166.737	160.739	92.965
	-18.165	10.111	6.323	-0.897
strong_defense	85	0	42	23
	30.103	47.548	45.838	26.511
	12.292	-9.164	-0.747	-0.825
more_say	77	39	0	44
	32.109	50.718	48.894	28.278
	9.800	-2.202	-9.280	3.604
beautiful_landscape	14	4	23	0
	8.228	12.997	12.529	7.246
	2.305	-3.093	3.636	-3.039

Pearson chi2(9) = 442.7087 Pr = 0.000
 likelihood-ratio chi2(9) = 595.4938 Pr = 0.000

Q32は、最優先される価値と次善の価値について尋ねている。「経済成長」を重視する者が最も多い (52.6%)。経済成長を最優先に掲げたものは、「安全保障」(44.68), 「市民の雇用やコミュニティにおける発言力の増大」(38.59), 「都市や農村の景観向上」(16.73) の順に次の優先順位が高くなる。「安全保障」を最優先に挙げたものにも (15.0%), 次点に経済成長を置くものが多い (56.67%)。市民の雇用やコミュニティにおける発言力の増大 (16.0%) を最

優先に挙げた者は2番目に多いが、次に経済成長(43.75%)、景観向上(28.39%)と続く。景観向上をトップに掲げるものは(4.1%)に留まるのであるが、市民の発言力向上を2位に置く(56.1%)者が経済成長(34.15%)より多い。経済成長と安保を重視する多数派と、ポスト物質主義的価値を重視する少数派とに緩やかな分岐が生じているようである。ただし、このなかでも経済成長を首位か次位のいずれかに挙げるものが多く、経済成長を犠牲にしてまで他の価値を優先する、ということまではいかないようである。



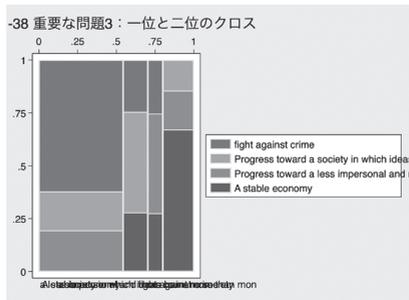
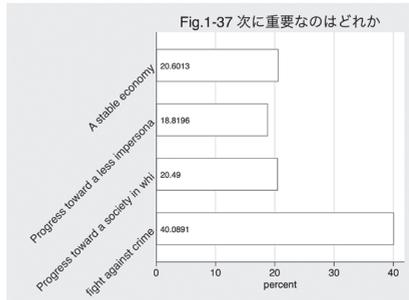
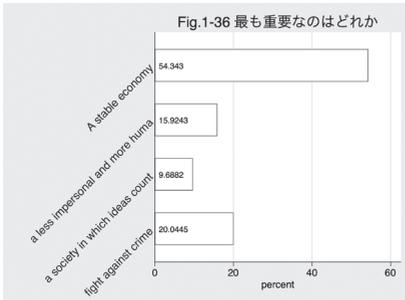
Tab. 1-21

Q34. next most important ?	Q34. most	important		
	Order	more_say	inflation	freedom_speech
order in the nation	0	51	98	30
	64.941	39.253	51.172	23.634
	-11.326	2.381	8.691	1.577
more_say	94	0	77	47
	79.091	47.805	62.321	28.783
	2.426	-9.037	2.541	4.209

Q34. next most important ?	Q34. Order	most more_say	inflation	important freedom_speech
inflation	135	85	0	38
	93.603	56.576	73.757	34.064
	6.390	5.098	-12.114	0.863
freedom_speech	87	55	74	0
	78.365	47.366	61.750	28.519
	1.409	1.448	2.127	-6.610

Pearson chi2(9) = 318.5573 Pr = 0.000
 likelihood-ratio chi2(9) = 517.3002 Pr = 0.000

次は別の組み合わせである。「国内秩序の維持」、「政府決定への国民の発言力拡大」、「インフレとの闘い」、「言論の自由の擁護」の4つのうちどれを第一、第二に挙げるかという質問項目 GQ34に関する回答割合を示したのが Fig. 1 -33, Fig. 1 -34である。調整済み残差が有意なセルをみるための表を Tab. 1 -21に、それを図示した spineplot を Fig. 1 -35に挙げた。「国内秩序」と「インフレ抑止」の組み合わせが26.7%と、最も多い組み合わせとなっている。



Tab. 1-22

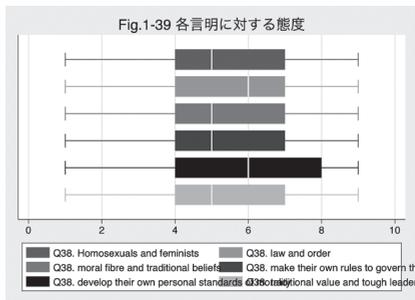
	Q36.	most	important
Q36. next most	stable_economy	humane_society	ideas > money fight_vs_crime
stable_economy	0	40	24 121
	100.535	29.460	17.923 37.082
	-16.653	2.377	1.695 17.296
humane_society	95	0	41 33
	91.840	26.912	16.373 33.875
	0.542	-6.279	7.108 -0.187
ideas>money	90	68	0 26
	99.991	29.301	17.826 36.882
	-1.658	8.744	-4.982 -2.247
fight_vs_crime	303	35	22 0
	195.635	57.327	34.878 72.160
	14.677	-4.155	-2.964 -12.274

Pearson chi2(9) = 578.0383 Pr = 0.000
likelihood-ratio chi2(9) = 692.3223 Pr = 0.000

また別の組み合わせである。「安定経済」, 「人道的社会に向けての努力」, 「カネより理念が重視される社会」, 「犯罪との闘い」の4つのうちどれを第一, 第二に挙げるかという質問項目 GQ36に関する回答割合を示したのが Fig. 1-36, Fig. 1-37である。クロス表 Tab. 1-22とその spineplot を Fig. 1-38に挙げた。安定経済と犯罪抑止が47.7%と, 最も多い組み合わせになっている。

最後の項目 Q38は, 1. 「伝統的価値に挑む同性愛者やフェミニストは称賛に値する」, 2. 「市民的権利よりも確かな法と秩序」, 3. 「伝統的な道徳的価値観を破壊するような倒錯は打破すべき」, 4. 「若者が好まない事柄に抗議する自由をもち, 自らの行動を律するルールを定めることは素晴らしい」, 5. 「聖書や伝統的価値よりも, 何が道徳的なのか非道徳的なのか自らの基準を確立すべき」, 6. 「国家の危機を克服するには, 伝統的価値に立ち戻り, タフなリーダーを据え, 悪しき思想を蔓延させるトラブルメーカーを黙らせるべき」という6つの言明に対する賛否を「非常に強く反対する」から「非常に強く賛成する」まで9点尺度で回答させたものである。このQG38の, 6つの政策的・イデオロギー的言明に対する賛否を9段階で尋ねた質問項目

について、因子分析を実施し、quartimax 斜行回転を施したところ、固有値が1を超えたのは一つのみの1因子構造となった(第2因子の固有値は.9152)。因子回転行列にみる2因子の相関は.2500で弱い相関があるが、固有値が1を割っているので因子スコアを用いた分析には使用しない。第一因子への因子負荷量大きい3変数は、いずれも.70を超える負荷量がある(Tab.1-26)。回転後のパターン行列から、この因子は「文化的保守性」と解釈できる。因子スコア f11を導出して、他の分析に投入することとする。



Tab. 1-23 Factor Analysis of QG38

Factor analysis/correlation	Number of obs = 914			
Method: principal factors	Retained factors = 2			
Rotation: orthogonal quartimax (Kaiser off)	Number of params = 11			
Factor	Variance	Difference	Proportion	Cumulative
Factor1	1.505	0.589	0.830	0.830
Factor2	0.915	.	0.505	1.335

LR test: independent vs. saturated: $\chi^2(15) = 1137.70$ Prob > $\chi^2 = 0.0000$
 Rotated factor loadings (pattern matrix) and unique variances

Variable	Factor1	Factor2	Uniqueness
QG38_1	-0.088	0.595	0.638
QG38_2	0.707	0.015	0.499
QG38_3	0.703	-0.006	0.505
QG38_4	-0.053	0.592	0.647
QG38_5	-0.031	0.447	0.799
QG38_6	0.706	-0.101	0.492

Factor rotation matrix

	Factor1	Factor2
Factor1	0.968	-0.250
Factor2	0.250	0.968

五
五

2. 分析

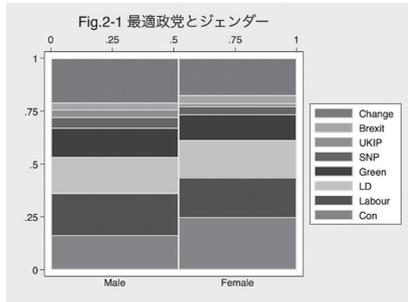
2.1 ジェンダー

本章は、第一章において行った記述統計的整理をもとに、変数同士の関係について簡単な分析を行うことから始めて、最終的な多変量解析に繋げようとするものである。まず本節では、欧州議会選挙にも通常の総選挙で観察されるようなジェンダー・ギャップがみられるのか、検討する。

Tab.2-0

Q2.	D3.	Are	you	â€'
最適政党		Male		Female
Con		64		90
		80.064		73.936
		-2.904		2.904
Labour		78		68
		75.905		70.095
		0.387		-0.387
LD		67		64
		68.106		62.894
		-0.213		0.213
Green		54		44
		50.950		47.050
		0.661		-0.661
SNP		20		14
		17.676		16.324
		0.816		-0.816
UKIP		14		5
		9.878		9.122
		1.917		-1.917
Brexit		13		14
		14.037		12.963
		-0.407		0.407
Change		82		63
		75.385		69.615
		1.224		-1.224

Pearson $\chi^2(7) = 12.8390$ Pr = 0.076
 likelihood-ratio $\chi^2(7) = 13.0303$ Pr = 0.071



Norris and Inglehart (2000) らのいう「現代的ジェンダー・ギャップ (modern gender gap)」は、conventional wisdom とみなしていいのだろうか。議席数の多寡には差がみられるとしても、欧州のほとんどの国で極右ポピュリスト政党（ここでは細かいヴァリエーションには拘泥しない）が政党システムのレパトリーに加わり、フランス国民戦線 Front National のマリヌ・ルペン Marine Le Pen やデンマーク国民党 Dansk Folkeparti のピア・ケアスゴー Pia Kjaersgaard らの名を挙げるまでもなく⁽¹⁾、これらの政党が高齢男性の政党の独占物と素朴に考えられる楽観的な状況ではなくなってきた。ナイジェル・ファラージ Nigel Farage に代わる UKIP の党首選に出馬したものの落選、その後反イスラム政党の The For Britain Movement を立ち上げたアン・ウォルターズ Anne M. Walters の例にみるように、イギリスを特別扱いする理由もまたなくなってきたように思われる。ここでは、EES2019においてジェンダー・ギャップがみられるのか確認してみたい。

まず、「重要争点に関する最適政党」Q2とジェンダーD3のクロス表 (Tab. 2-0) をとったところ、カイ二乗の値 (.076) からは10%水準でないと独立性の仮定を棄却できないうえ、クラメールのVは .1305と、あまり両変数の関連は強くないことがわかる。各セルの調整済み残差の有意性を確認してみ

五三

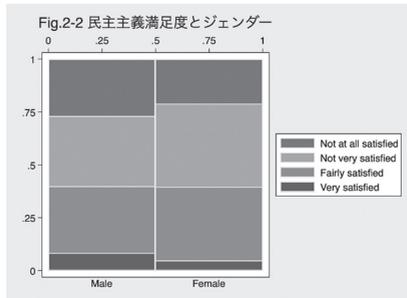
(1) 'Ukip under fire for choosing candidate who called Islam evil', The Guardian 27 Apr 2017 (<https://www.theguardian.com/politics/2017/apr/27/ukip-anne-marie-walters-islam-pegida>)

も、「最適政党なし」で女性のほうが多い（調整済み残差2.904）くらいで、目立った傾向は存在しない。spineplot で図示した。「民主主義への満足度」に関して、上と同様の分析を行っても。クラメールのVが.1094で、全体として連関は弱く、「非常に満足」と「全く満足していない」のセルが有意に少ないだけである。判断に苦しむ結果である。

Tab.2-1

Q3	Male	Female
Very satisfied	40	23
	31.368	31.632
	2.250	-2.250
Fairly satisfied	150	167
	157.837	159.163
	-1.077	1.077
Not very satisfied	158	189
	172.774	174.226
	-1.987	1.987
Not at all satisfied	128	101
	114.021	114.979
	2.119	-2.119

Pearson $\chi^2(3) = 11.4353$ Pr = 0.010
 likelihood-ratio $\chi^2(3) = 11.5040$ Pr = 0.009



Tab.2-2

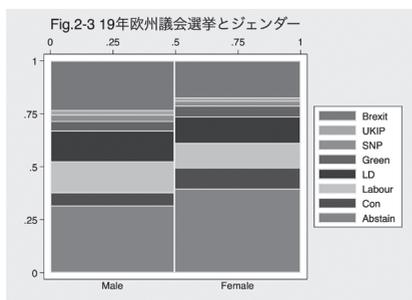
D3. Are	best	at	dealing	with	this	proble
you	Con	Labour	LD	Green	SNP	Brexit
Male	64	78	67	54	20	13
	7.261	3.247	5.722	9.166	7.058	3.546
	-2.48	0.91	0.25	1.07	1.04	-0.22
Female	90	68	64	44	14	14
	76.74	72.75	65.28	48.83	16.94	13.45
	2.49	-0.91	-0.25	-1.07	-1.04	0.22

Pearson $\chi^2(7) = 12.8390$ Pr = 0.076
 likelihood-ratio $\chi^2(7) = 13.0303$ Pr = 0.071

Tab.2-3 a

	Male	Female
C	160	160
	163.912	156.088
	-0.571	0.571
L	141	134
	140.862	134.138
	0.021	-0.021
LD	36	37
	37.393	35.607
	-0.343	0.343
Sn	17	18
	17.928	17.072
	-0.321	0.321
G	17	12
	14.855	14.145
	0.812	-0.812
UKIP	27	18
	23.050	21.950
	1.214	-1.214

Pearson $\chi^2(5) = 2.4194$ Pr = 0.789
 likelihood-ratio $\chi^2(5) = 2.4344$ Pr = 0.786



民主主義への満足度 (Q3) については、ジェンダーとの関連は独立ではなく ($\chi^2 = .010, p < .05$), spineplot (Fig.2-2) からもみてとれるように、「非常に満足」と「全く満足していない」のセルにおいて男性より有意に多目に

なっており、男性と比べて程々満足している、という程度であろう (Tab.2-1)。

次は選挙における投票に関する変数である。Tab.2-3aにあるように、2017年総選挙では男女差がほとんどみられなかったが⁽²⁾、今回優位な差は棄権 (2.534)、保守党 (2.076)、Brexit 党 (-2.245) のセルにみられる (Tab.2-3b⁽³⁾)。解釈が難しいところであるが、女性はEU離脱を支持する場合でも、やや保守的に保守党を選択するということであろうか。棄権が多いのは最近の傾向でもある。⁽⁴⁾

q10_1 から q10_7 の各政党に「投票しそうな確率」の11点満点評価については、それぞれ平均値の t 検定を実施したが、有意な男女差がまったくみられなかった (数表は省略)。

上で述べたことと矛盾するようにも思えるが、「投票しそうな確率」の意味が不分明なところもあるので、あまり深く追求すまい。左右スケール上の位置 q13についても t 検定で差をみた。まず自己の位置付けには、有意な男女差がみられず (数表略)、これは三大政党と SNP の位置づけについても同じである。緑については若干の有意な差がある⁽⁵⁾が、さほど意味があるとも思わ

Tab.2-3b

vparty	Male	Female
Abstain	147	187
	165.573	168.427
	-2.534	2.534
Con	29	47
	37.675	38.325
	-2.076	2.076
Labour	68	55
	60.974	62.026
	1.359	-1.359
LD	67	59
	62.462	63.538
	0.869	-0.869
Green	21	24
	22.308	22.692
	-0.400	0.400
Brexit	108	82
	94.188	95.812
	2.245	-2.245

Pearson chi2(7) = 15.5156 Pr = 0.030
likelihood-ratio chi2(7) = 15.5846 Pr = 0.029

(2) Tab.2-3a のカイ二乗値0.789から、2つの変数が統計的に独立であることを否定できない。統計的に有意な調整済み残差がみられるセルもない。

(3) クロス表 Tab.2-3b は、全体として chi2 = .030, p < .05 で独立ではない。

(4) Fraile, Marta and Raul Gómez, 'Bridging the gender gap: How to address low levels of political interest among women', (<https://blogs.lse.ac.uk/europpblog/2017/04/25/bridging-the-gender-gap-political-interest-women/>) and Fraile and Gómez (2017)

(5) 男性の方が左に位置づける (-.44742, t = -2.5857, df = 794, p < .01)。

れない。これが、ポピュリスト政党となると、男女差が顕れてくる。男性のほうが、有意に UKIP⁽⁶⁾, Brexit⁽⁷⁾を右に位置づけているのである。それぞれの政党について男女ともに並びはほとんど同位置である。またそれらの位置は、保守党のそれと有意な違いがない。

個別の政策に関する評価を11点尺度で尋ねた Q14_1 から Q14_6 について、平均値の男女差を t 検定によって検証した。「同性婚への賛否」, 「成長 vs 環境」について、前者において女性がより賛成⁽⁸⁾, 後者において女性がより環境重視⁽⁹⁾という形で有意な差がみられた。そのほかの「経済の国家規制」, 「富の再分配」, 「市民的自由 vs 犯罪抑止」, 「移民の抑制」に関してはやや意外なことに有意差がみられなかった(数表は省略)。

Tab. 2-4

general economic situation Q20	D3.	Are	you
		Male	Female
Get a lot better		18	17
		17.462	17.538
		0.186	-0.186
Get a little better		88	60
		73.838	74.162
		2.544	-2.544
Stay the same		116	120
		117.741	118.259
		-0.263	0.263
Get a little worse		136	173
		154.161	154.839
		-2.541	2.541
Get a lot worse		97	87
		91.798	92.202
		0.858	-0.858

Pearson chi2(4) = 10.3632 Pr = 0.035
likelihood-ratio chi2(4) = 10.4062 Pr = 0.034

(6) 差 .8720637, t = 4.0680, d.f. = 798, p < .001

(7) 差 .7104829, t = 3.5302, d.f. = 801, p < .001

(8) 差 1.244699, t = 5.3053, d.f. = 956, p < .0001

(9) こちらのほうが差が小さい(差 .3422488, t = 1.9467, d.f. = 943, p < .05)

個人的な経済状況の変化については男女差が見られないが(数表略), イギリス全体の経済状況 Q20について, 女性の方が「若干改善している」の割合が有意に低く, 「やや悪化」の割合が有意に高かった (Tab.2-4)。

政治的関心 (Tab.2-5) は男女ではっきりした違いがある (クロス表の χ^2 二乗 = .000)。有意差があるセルをみると, 男性と比べ「とても関心がある」の割合がかなり低く(調整済み残差 -5.560)。「すこしだけ」(同 2.380)「まったくない」(3.525) の割合が高い。クラメールの V は .2031。その他の変数にも影響を及ぼすだろう。

EUに加盟していることの評価 Q22には有意な男女差がみられない (Tab.2-6)。また, Q23「統合は行き過ぎ/さらに進展すべし」の11点尺度の平均は10%水準に基準を緩めないと有意差が認められなかった ($t(847) = -1.6344, p < .10$ 。数表は省略)。EU 統合や加盟についての意見に男女差はみられないようである。共通してネガティブということである。

Tab.2-5

Q21	D3.		Are you
	Male	Female	
Very	123	58	
	89.283	91.717	
	5.560	-5.560	
Somewhat	181	182	
	179.060	183.940	
	0.258	-0.258	
A little	128	166	
	145.024	148.976	
	-2.380	2.380	
Not at all	45	84	
	63.633	65.367	
	-3.525	3.525	

Pearson $\chi^2(3) = 39.8800$ Pr = 0.000
 likelihood-ratio $\chi^2(3) = 40.6026$ Pr = 0.000

Tab.2-6

Q22	D3.		Are you
	Male	Female	
A good thing	218	217	
	218.903	216.097	
	-0.119	0.119	
A bad thing	180	17	
	177.135	174.865	
	0.387	-0.387	
Neither	70	73	
	71.961	71.039	
	-0.357	0.357	

Pearson $\chi^2(2) = 0.2084$ Pr = 0.901
 likelihood-ratio $\chi^2(2) = 0.2084$ Pr = 0.901

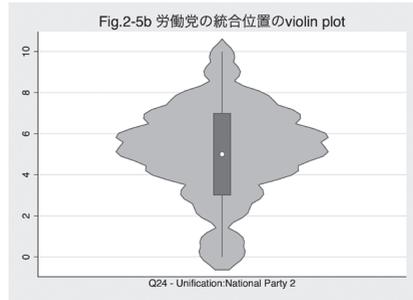
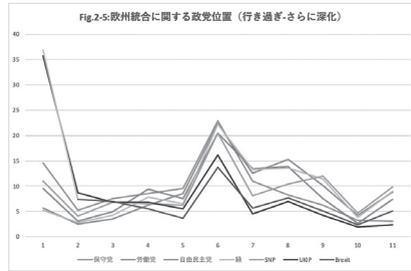
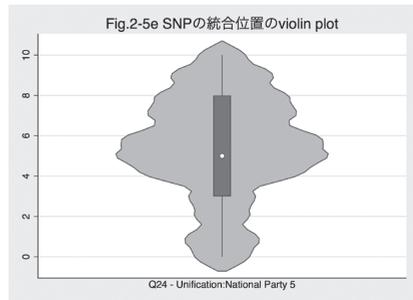
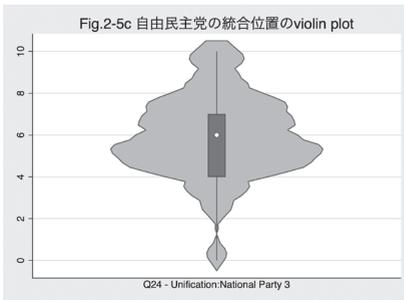
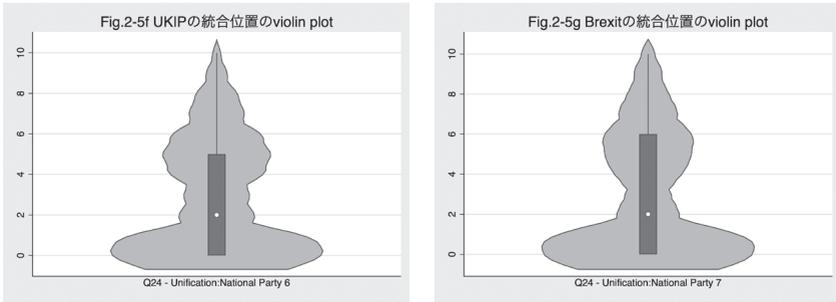


Fig.2-5, 2-5a~2-5eは、Q23におけるのと同様に、回答者が各政党を欧州統合への見解に関する11点スケール上に位置づけたものの分布である。Fig.2-5とヴァイオリン・プロットの意味は同じある。こうしてみると、二大政党と自由民主党の位置付けの差違は、UKIPとBrexitという離脱政党との違いと比べれば、なかのboxをみれば無視できるものではないとはいえ、さほど大きいものではない。有権者の自己位置付け (Fig.1-Q23) を考えれば、保守党がBrexitに票を奪われたのも理解しやすい。





Q23と同様のスケール上に各政党を位置づけさせた Q24_1～Q24_7についてもそれぞれ男女別サンプルの平均値の差をみた(数表は省略)。有意な差がみられたのは離脱を主張している3党で、いずれも男性のほうが女性よりそれらの政党を「行き過ぎ」の方向に遠ざける傾向がみられた。⁽¹⁰⁾保守党が -0.46 「行き過ぎ」寄り ($t(783) = -2.3667, p < .01$), UKIPも男性が -0.74 「行き過ぎ」寄り ($t(767) = -3.4719, p < .001$), Brexitも男性が -0.79 「行き過ぎ」寄り ($t(780) = -3.3962, p < .001$)。分散は男女で違いがないので、上記の自己位置の違いや政治的関心の差が影響しているとも考えにくい。

Q25の「近いと感じる政党」について、男女差がみられるのはDK(調整済み残差2.316)、なし(2.403)、Brexit(2.308)のセルであった(数表は省略)。独立性の検定では $\chi^2(9) = 17.9564, p < .05$ で有意であるが連関は小さい($V = .1340$)。これも政治的関心の低さゆえか、政党一体感も弱めに出ている。政党名を挙げたなかでは、女性向けアピールに大きな関心を払わないBrexitへの支持の若干の低さがみられた程度である。上述の通り、2017年総選挙における前身政党UKIPへの投票の男女差は有意でなかった(若干は男性が多い)ことをどう考えればよいのだろうか。

Q32の優先事項に関する質問(経済成長, 国防, 国民の国政への発言力, 美しい景観)については男女差がみられなかった。選択肢が異なるQ34(国内秩序, 国民の国政への発言力, 物価上昇との闘い, 言論の自由)では女性

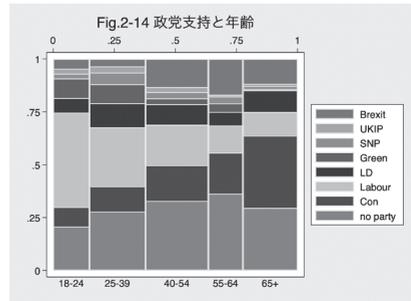
(10) 政治的関心の違いだろうか。より詳細なデータで検討したい。

の方が「言論の自由」を最優先に取り上げる割合が低い(調整済み残差-3.090)。男女の有意差がみられるのはこの行のみであった。もう一つの選択肢(安定経済, 人道的社会, カネより理想, 犯罪との闘い)では, 最優先事項において有意な男女差はなく, 二番目に安定経済を挙げるものが多い(調整済み残差2.951)程度であった。

政策や価値観に関する態度を9点尺度で尋ねたQ38についてのジェンダー・ギャップを検討する。同性愛者やフェミニストへの評価について, 平均で女性の方が-.5365ポイント男性より高く評価しており, 統計的に有意である ($t(953) = -3.6498, p < .001$)。QG38_5の「聖書や伝統的な宗教的ガイドダンスに注目するかわりに自らの道徳的基準を確立すべし」への評価に男女差が全くみられないが, 残り4つは10%水準であれば男女差が有意になる(数表は省略)。

2.2 年齢

年代と政党支持との関連をみる (Tab.2-9)。全体として有意な差が見られる (χ^2 乗 $< .001$) クロス表⁽¹¹⁾のなかで, セルに有意な増減がみら



れるところを挙げてみよう。spineplot も示した (Fig.2-14)。18~24歳代で多いのが, 労働党支持(調整済み残差6.640), SNP (2.565), 少ないのが保守党 (-3.035), Brexit (-2.196) である。25~39歳代は, 保守党 (-2.848)・Brexit (-3.483) で少なく, 労働党 (2.174)・SNP (3.145) で高い。この二つのカテゴリは似た傾向をもっている。40~54歳代は, 年齢と政党支持が独立な場合との有意な違いがなく, 下の年齢階層と, 次の上の階層との切り替わりの年代となっている。55~64歳代では, 労働党 (-2.703) が少なく, Brexit

四五

(11) 度数が5を下回るセルが多い行(支持者のサンプルが少ない SNP や UKIP の行)は省略している。全体の連関は若干弱いながらある ($V = .2045$)。

(2.815) で多い。65歳以上では保守党支持が強く (6.237), 労働党 (-4.251)・SNP (-3.186) への支持が弱い。

Tab. 2-9

	hAGE				
partyi	18-24	25-39	40-54	55-64	65+
no party	27	56	74	45	58
	38.584	59.658	66.781	36.804	58.174
	-2.410	-0.643	1.222	1.739	-0.031
Con	12	24	38	24	67
	24.486	37.860	42.380	23.356	36.918
	-3.035	-2.848	-0.866	0.160	6.237
Labour	58	56	43	16	22
	28.938	44.743	50.086	27.603	43.630
	6.640	2.174	-1.317	-2.703	-4.215
LD	9	23	22	8	20
	12.169	18.815	21.062	11.607	18.347
	-1.034	1.154	0.249	-1.200	0.460
Green	12	18	6	5	1
	6.233	9.637	10.788	5.945	9.397
	2.565	3.145	-1.733	-0.429	-3.186
Brexit	6	7	30	21	23
	12.911	19.962	22.346	12.315	19.466
	-2.196	-3.483	1.979	2.815	0.958

7 cells with expected frequency < 5
 Pearson chi2(28) = 146.5731 Pr = 0.000
 likelihood-ratio chi2(28) = 146.0148 Pr = 0.000

Tab. 2-10

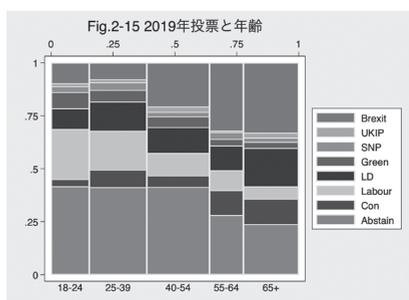
	HAGE.		Age		recode	
vparty	18-24	25-39	40-54	55-64	65+	
Abstain	60	90	98	36	50	
	51.385	77.791	84.571	45.675	74.579	
	1.629	1.971	2.107	-1.921	-4.027	
Con	5	18	13	15	25	
	11.692	17.701	19.244	10.393	16.970	
	-2.220	0.085	-1.718	1.605	2.307	
Labour	34	40	25	12	12	
	18.92	28.65	31.14	16.82	27.47	
	4.04	2.60	-1.37	-1.36	-3.59	

四
四

	HAGE.		Age		recode
LD	14	30	29	15	38
	19.39	29.35	31.90	17.23	28.14
	-1.43	0.15	-0.64	-0.62	2.27
Green	11	12	12	4	6
	6.92	10.48	11.39	6.15	10.05
	1.73	0.55	0.21	-0.96	-1.49
Brexit	14	17	49	41	69
	29.23	44.25	48.11	25.98	42.43
	-3.43	-5.24	0.17	3.55	5.19

Pearson $\chi^2(28) = 119.6098$ Pr = 0.000
 likelihood-ratio $\chi^2(28) = 124.0110$ Pr = 0.000

2019年欧州議会選挙における投票と年齢層とのクロス表から両者の関連をみる (Fig. 2-15および Tab. 2-10)。カイ二乗検定 ($\chi^2(28) = 119.6098$, $p < .0001$) から、両者は独立ではない。⁽¹²⁾ なかでも調整済み残差が有意なセルは、18~24歳代の保守党 (調整済み残差 -2.220)、労働党 (4.043)、Brexit (-3.430)、25~39歳代の労働党 (2.598)、Brexit (-5.239)、40~54歳代の棄権 (2.107)、55~64歳代の Brexit (3.552)、64歳以上の棄権 (-4.027)、保守党 (2.307)、労働党 (-3.593)、自由民主党 (2.269)、Brexit (5.186) である。投票率は55以上の高齢者層によって支えられており、残差が有意にならなくても、下の年齢層は棄権が相対的に多めになっている。実際の投票においても、上述の政党支持と同様の傾向がみられることを考えると、Brexitの得票率は、これを支持する割合



が高く、実際に投票にも行った高齢層の影響が大きかったといえよう。

二つの spineplot を比較すると、Fig. 2-14では年齢が上がるに従って保守党支持が上がるのがわかる。これに反してにわか作り⁽¹³⁾の Brexit 党の高齢層

(12) 度数が5を下回るセルを多く含む行を省略しているのは Tab. 2-9に同じ。

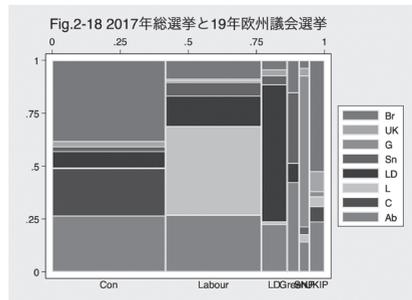
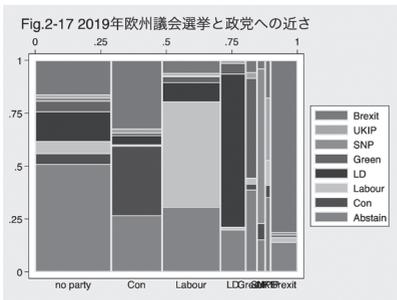
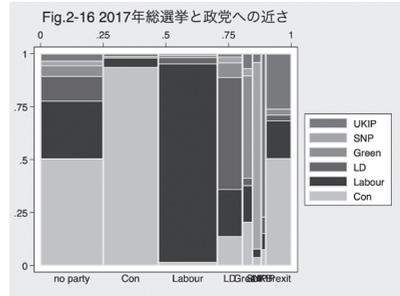
(13) UKIP から分裂したのは2019年1月。この時点で下院に議席はなく、UKIP から引き継

の支持は固まっていない。Fig.2-15では、2019年欧州議会選挙における Brexit への投票が年齢とともに高くなっていくが、結局 Brexit への支持は保守党を犠牲にしたものだったことがみてとれよう。

2.3 政党支持と投票

Fig.2-16の spineplot は、政党支持 (Q) と2017年総選挙での投票の関係を見るためのクロス表をもとにしている。この選挙で第一党となった保守党は、自らの支持層をがっちりキープしたうえ、(2019年欧州議会選時における)

支持政党なし層の(少なくとも投票した者の)半分と自由民主支持の一部、Brexit 支持(おそらくかなりは UKIP 支持者)の半分を獲得していたのである。労働党も自らの支持層はほとんど固めたうえで、支持なし層の1/4を獲得していた。2017年総選挙では二大政党の占有率が復活していたのである。ただし、Brexit 党はこの時点では存在しなかったが、UKIP に投票した1/4の支持者とおよそ半数の保守党を支持していた者、これが19年5月に Brexit に流れたことになる。(14)



いだ MEP とウェールズ地域議会議員のみ。Electoral Commission, GB and NI political register updates since 27-01-2019, 5 February 2019. (<https://www.electoralcommission.org.uk/media/2598>)

(14) Brexit は UKIP の splinter party なので、別の表現のほうが正確かもしれない。

Tab.2-11

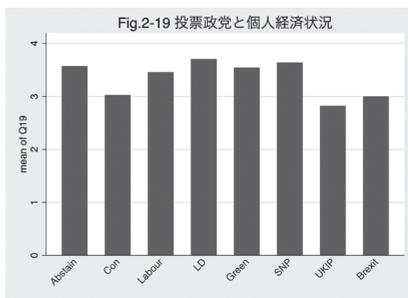
2019/2017	C	L	LD	SNP	G	UK
Abstain	83	71	16	14	4	10
	82.37	69.70	18.74	8.71	7.39	11.09
	0.11	0.23	-0.78	2.14	-1.48	-0.39
Con	70	1	0	0	0	3
	30.78	26.05	7.01	3.26	2.76	4.14
	9.74	-6.42	-2.93	-1.94	-1.78	-0.61
Labour	1	110	1	0	1	2
	47.84	40.48	10.89	5.06	4.29	6.44
	-9.63	14.75	-3.42	-2.50	-1.76	-1.96
LD	24	38	46	3	0	0
	46.18	39.07	10.51	4.88	4.14	6.22
	-4.63	-0.23	12.47	-0.95	-2.25	-2.78
SNP	0	2	0	0	20	1
	9.568	8.096	2.177	1.012	0.859	1.288
	-4.111	-2.703	-1.575	-1.045	21.384	-0.265
Brexit	119	23	3	5	1	22
	71.97	60.90	16.38	7.61	6.46	9.69
	8.27	-6.88	-3.96	-1.10	-2.50	4.64

18 cells with expected frequency < 5

4 cells with expected frequency < 1

likelihood-ratio $\chi^2(35) = 668.8304$ Pr = 0.000

2017年総選挙で投票した政党と2019年欧州議会選挙で投票した政党をクロスした spineplot (Fig.2-18, Tab.2-11) をみると、各政党に投票した経験があるもののうち、似たような割合 (1/4強) が棄権していることがわかる。そして17年で第一党となった政権政党保守党が2/3の得票を、特に Brexit に失っていることがわかる。労働党も4割の票を (保守党以外の) 他党に失っているが、保守党に比べれば踏みとどまっている。⁽¹⁵⁾自由民主党、SNP はそれぞれ歩留まりが大きく (緑は棄権に流れているためこれらに劣るが)、比例代表制という選挙



制度の影響があるものと考えられる。Brexit は UKIP 票を半分以上継承し、他党、特に保守党から奪っている。

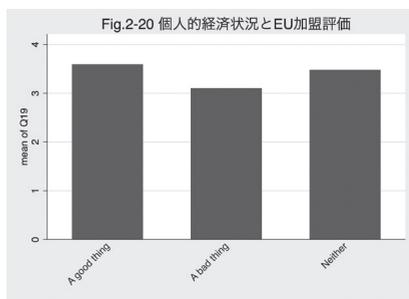
Tab. 2-12

Pairwise comparisons of means with equal variances

Q19	Contrast	Std.Err.	t	P>t	[95%Conf Interval]	
vparty						
Con_vs_Abstain	-.543442	.1276457	-4.26	0.012	-1.02343	-.063452
Lab_vs_Abstain	-.112842	.1068947	-1.06	0.993	-.514802	.2891171
LD_vs_Abstain	.1354126	.1065725	1.27	0.978	-.265335	.5361607
Grn_vs_Abst	-.025015	.1587221	-0.16	1.000	-.621863	.5718326
SNP_vs_Abst	.0695302	.2046359	0.34	1.000	-.699969	.8390294
UKIPvs_Abst	-.746940	.2450651	-3.05	0.234	-1.66846	.1745859
Brex_vs_Abst	-.570469	.091387	-6.24	0.000	-.914115	-.226824
Lab_vs_Con	.4306001	.1457312	2.95	0.274	-.117397	.9785979
LD_vs_Con	.6788553	.145495	4.67	0.003	.1317457	1.225965
Grn_vs_Con	.5184275	.187093	2.77	0.363	-.185104	1.22196
SNP_vs_Con	.612973	.2273477	2.70	0.402	-.241929	1.467876
UKIP_vs_Con	-.203497	.2643255	-0.77	0.999	-1.19745	.7904544
Brex_vs_Con	-.027027	.134769	-0.20	1.000	-.533803	.4797491
LD_vs_Lab	.2482552	.1276787	1.94	0.804	-.231859	.7283696
Grn_vs_Lab	.0878274	.1735997	0.51	1.000	-.564965	.74062
SNP_vs_Lab	.1823729	.2163793	0.84	0.998	-.631285	.9960312
UKIP_vs_Lab	-.634097	.254953	-2.49	0.519	-1.59280	.3246106
Brex_vs_Lab	-.457627	.1153071	-3.97	0.028	-.891220	-.024034
Green_vs_LD	-.160427	.1734014	-0.93	0.997	-.81247	.4916194
SNP_vs_LD	-.065882	.2162203	-0.30	1.000	-.878942	.7471781
UKIP_vs_LD	-.882352	.2548181	-3.46	0.102	-1.84055	.0758479
Brex_vs_LD	-.705882	.1150084	-6.14	0.000	-1.13835	-.273412
SNP_vs_Grn	.0945455	.2461427	0.38	1.000	-.831033	1.020124
UKIP_vs_Grn	-.721925	.280655	-2.57	0.471	-1.77728	.3334313
Brexit_vs_Green	-.545454	.1645051	-3.32	0.141	-1.16404	.0731396
UKIP_vs_SNP	-.816470	.3089505	-2.64	0.431	-1.97822	.3452862
Brex_vs_SNP	-.64	.2091533	-3.06	0.229	-1.42648	.1464861
Brex_vs_UKIP	.1764706	.2488496	0.71	0.999	-.759286	1.112228

(15) こうしたことを考えるには時期尚早ではあるが、2019年12月総選挙で労働党が伝統的に強かった選挙区を（Brexit との選挙協力を成し遂げた）保守党に奪われたことと考えると、この違いが奈辺に由来するのか、興味深いところである。EES2019には党首評価のような変数が含まれないので、この点において比較が難しいことが惜まれる。

Tab. 2-12には、Schefféの方法による多重比較の結果を示した。有意差がみられるのは、「棄権」vs 保守党 ($p < .05$)・Brexit ($p < .0001$), 保守党 vs 自由民主党 ($p < .001$), 労働党 vs Brexit 党 ($p < .05$), 自由民主党 vs Brexit ($p < .0001$), それぞれのあいだ, ということになる。通常, 棄権者は経済状況に不満を持っている者が多いが, 今回は自由民主党や労働党支持者とあまり変わらない意見をもつ者が, しかしそれらの政党には投票せずに棄権して, EU 離脱を推進しようとする政権党や EU 離脱の最強硬派 Brexit に向かったわけでもない。であれば, 過去1年の個人の経済的状況悪化の不満が Brexit 支持に繋がったわけではないということであろう。次のグラフは EU の加盟国であることを良いこと・悪いこと・どちらでもない, で答えさせる Q22 ごとに, 経済状況への判断の平均を見たものである (Fig. 2-20)。経済状況が悪化していると答えているものが欧州統合支持, それより経済状況がましだと考えている者が欧州統合不支持という関連がある (因果関係とまではいえない) ことを示している。経済状況の短期的 (1年レベル) な悪化への不満が EU 不支持をもたらすというわけではない。離脱問題にかまけて混乱におちいつている政権党保守党のせいで経済が好転しないという印象をもっているのかもしれない。



Tab. 2-14

Q19	Contrast	Std.Err.	t	P > t	[95%_Conf Interval]
Q22					
bad_vs_good	-.488096	.0740167	-6.59	0.000	-.669572 -.306619
Neither_vs_good	-.112972	.1003095	-1.13	0.531	-.358914 .1329701
Neither_vs_bad	.3751236	.1027811	3.65	0.001	.1231212 .6271259

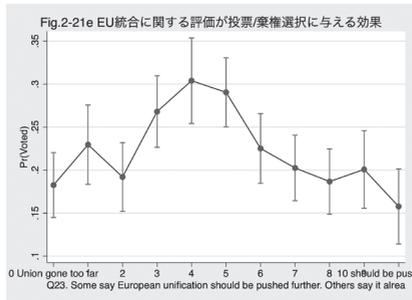
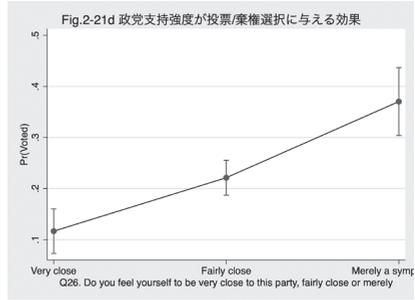
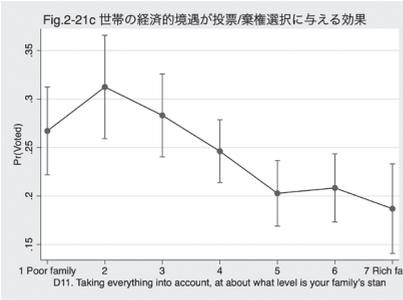
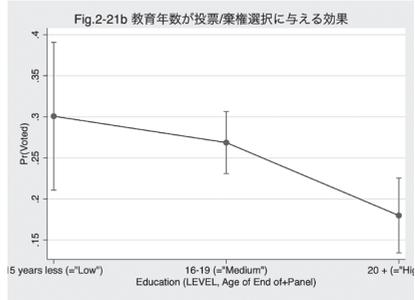
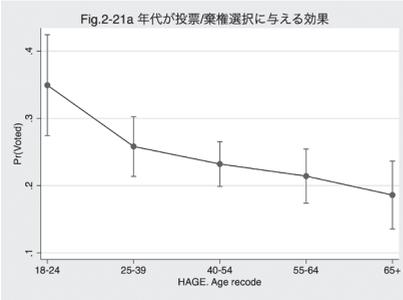
2.4 投票選択

投票/棄権の要因：ロジット分析
Tab.2-16

voted	Coef.	Std. Err.	z	P > z	[95% Conf. Interval]	
EDU	-.558388	.2049742	-2.72	0.006	-.96013	-.156645
hAge	-.256497	.0948863	-2.70	0.007	-.442471	-.070524
Q8	-.267015	.0416297	-6.41	0.000	-.348607	-.185422
partyi2	.5682148	.4763851	1.19	0.233	-.365482	1.501912
partyi3	.568548	.4623325	1.23	0.219	-.337607	1.474703
partyi4	.2922697	.5300968	0.55	0.581	-.746701	1.33124
partyi5	.970529	.5678702	1.71	0.087	-.142476	2.083534
partyi8	-.300857	.5718969	-0.53	0.599	-.142175	.8200397
Q26	.4322161	.1812582	2.38	0.017	.0769566	.7874757
Q19	.1371828	.1157256	1.19	0.236	-.089635	.3640009
cons	.6828375	.9316569	0.73	0.464	-1.14317	2.50885

本節では、まず投票と棄権を分けた要因を知るために、ロジスティック回帰分析を実施した。第1章や第2章1, 2節を参考に、年代や教育水準といったデモグラフィック変数や政党アイデンティフィケーション、有権者の左右位置、欧州統合に対する態度といった変数を独立変数として投入した。推定結果は Tab.2-16に示した(Log likelihood = -247.45162, Prob > chi 2 = .0000, Pseudo R squared = .1609, N = 537)。係数が有意なのは、教育水準(年数)3段階、年代(5段階)、選挙キャンペーンのフォロー(10段階)、保守党支持、緑支持(ただし $p < .1$)、政党支持強度(3段階)であった。marginsパッケージを使用して、他の条件を固定したうえで5つの独立変数が変化するとき、投票0/棄権1の確率がどう変化するかシミュレートし、marginsplotに示している。それぞれ他の条件を一定に保った場合、年代が上がるにつれ、投票にいく割合は上昇する(Fig.2-21a)。教育水準も上がるにつれて投票率は上がる(Fig.2-21b)。世帯の経済水準も、最下層よりその一つ上が低くなっているが、豊かになるほど投票率は上がっている(Fig.2-21c)。政党支持強度は高いほうが投票率は上がる(Fig.2-21d)。これらはいずれも下院総選

拳でもみられる一般的傾向に合致する。欧州統合に関する評価については、「行き過ぎ」「より推進」を強く感じている両端のほうが投票率が上がる。投票に行くことに関して主観的な stake が高いということであろう (Fig.2-21e)。

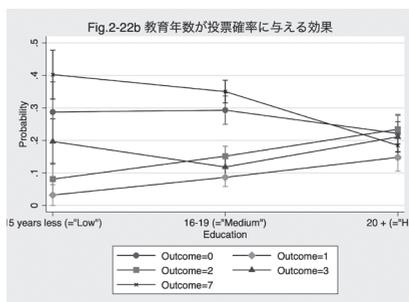
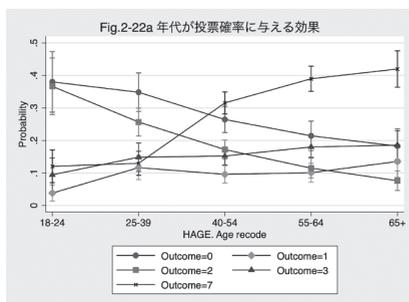


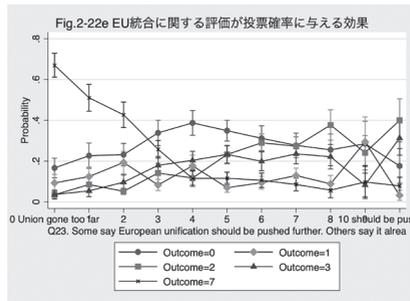
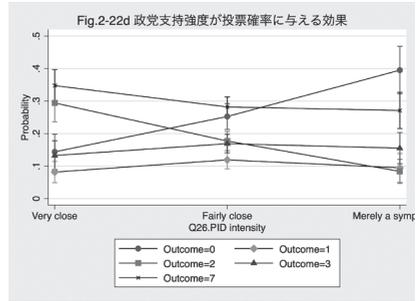
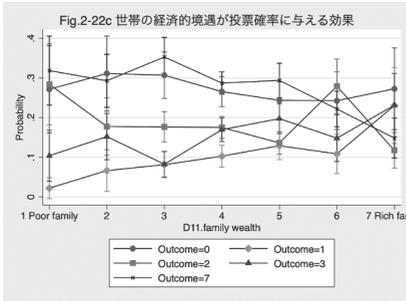
投票選択の要因

Tab.2-17：多項ロジット分析

vvparty	Coef.	Std. Err.	z	P > z	[95% Conf. Interval]	
Ab	(base outcome)					
C						
EDU	1.332532	.4446157	3.00	0.003	.4611017	2.203963
hAge	.2585845	.2036752	1.27	0.204	-.140611	.6577805
Q8	.1898693	.0827944	2.29	0.022	.0275952	.3521433
partyi2	2.606977	.7158266	3.64	0.000	1.203983	4.009972
partyi3	-14.4890	.6610964	-0.02	0.983	-1310.21	1281.236
partyi8	-12.9757	.9202163	-0.01	0.989	-1816.56	1790.615
Q26	-.295846	.3570376	-0.83	0.407	-.995627	.4039339
Q19	-.521825	.2619993	-1.99	0.046	-1.03533	-.008316
f11	.3689899	.315945	1.17	0.243	-.250251	.9882308
D11	-.068258	.2306372	-0.30	0.767	-.520299	.3837818
Q23	.0711678	.0871057	0.82	0.414	-.099556	.2418918
D7	-.009883	.2452223	-0.04	0.968	-.490510	.4707434
_cons	-5.2768	2.082771	-2.53	0.011	-9.35895	-1.19464
L						
EDU	.5431711	.3707804	1.46	0.143	-.183545	1.269887
hAge	.0051229	.1696764	0.03	0.976	-.327436	.3376825
Q8	.2445794	.093188	2.62	0.009	.0619342	.4272246
partyi2	-.586786	1.228246	-0.48	0.633	-2.99410	1.820532
partyi3	3.202082	.6845921	4.68	0.000	1.860306	4.543858
partyi8	1.188158	1.082569	1.10	0.272	-.933639	3.309955
Q26	-.896613	.3183505	-2.82	0.005	-1.52056	-.272657
Q19	.1883214	.1998206	0.94	0.346	-.203319	.5799626
f11	-.286194	.2363421	-1.21	0.226	-.749416	.1770271
D11	-.036987	.1701157	-0.22	0.828	-.370407	.2964335
Q23	.0230624	.0777626	0.30	0.767	-.129349	.1754744
D7	.2210621	.2194801	1.01	0.314	-.209110	.6512351
_cons	-4.70046	1.697386	-2.77	0.006	-8.02728	-1.37365
LD						
EDU	.0906217	.3468274	0.26	0.794	-.589147	.7703909
hAge	.5612523	.1651895	3.40	0.001	.2374869	.8850177
Q8	.2286618	.0795238	2.88	0.004	.072798	.3845256
partyi2	-2.28655	.6349447	-3.60	0.000	-3.53102	-1.04208
partyi3	-1.41196	.4719417	-2.99	0.003	-2.33694	-.486970
partyi8	-15.5711	.7437863	-0.02	0.983	-1473.36	1442.223

	Coef.	Std. Err.	z	P > z	[95% Conf. Interval]	
Ab						
	(base outcome)					
Q26	-.523712	.3113603	-1.68	0.093	-.113396	.0865424
Q19	.1229652	.2025784	0.61	0.544	-.274081	.5200115
fl1	-.510333	.239309	-2.13	0.033	-.97937	-.041296
D11	.1522924	.181456	0.84	0.401	-.203354	.5079396
Q23	.0939123	.0805248	1.17	0.244	-.063913	.251738
D7	.2589777	.2215309	1.17	0.242	-.175214	.6931702
_cons	-4.08009	1.612775	-2.53	0.011	-7.24108	-.919117
Br						
EDU	.4893936	.3666005	1.33	0.182	-.229130	1.207917
hAge	.184084	.1686984	1.09	0.275	-.146558	.5147269
Q8	.5289715	.0846627	6.25	0.000	.3630357	.6949073
partyi2	1.871866	.6764331	2.77	0.006	.5460811	3.19765
partyi3	1.07251	.6950878	1.54	0.123	-.289837	2.434857
partyi8	3.718296	.7607569	4.89	0.000	2.22724	5.209352
Q26	.2132837	.2974212	0.72	0.473	-.369651	.7962186
Q19	-.389079	.1969925	-1.98	0.048	-.775177	-.002981
fl1	.3375593	.2487047	1.36	0.175	-.149893	.8250115
D11	-.152464	.1706387	-0.89	0.372	-.486910	.1819808
Q23	-.273338	.0762264	-3.59	0.000	-.42274	-.123937
D7	.0551435	.2021338	0.27	0.785	-.341031	.4513184
_cons	-4.86717	1.669653	-2.92	0.004	-8.13963	-1.59471





次に、投票選択の要因を知るために、多項ロジスティック回帰分析を実施した。従属変数は、各政党に投票したサンプルの数を考慮して、棄権・保守党・労働党・自由民主党・Brexitの5択とした。ここでも第1章や第2章1, 2節を参考に、年代や教育水準といったデモグラフィック変数や政党アイデンティフィケーション、有権者の左右位置、欧州統合に対する態度、政治的・イデオロギーの問題に関する態度といった変数を独立変数として投入した。推定結果はTab.2-18に示した。ベースラインは「棄権」である。目安ではあるが疑似R二乗が.4526あるので、当てはまりはそこそこといえよう(N=417, Prob > chi2=.0000, Log likelihood = -353.32031, Pseudo R-squared =.4526)。「保守党 vs 棄権」については、キャンペーン接触、保守党支持の二つのみ有意である。「労働党 vs 棄権」では、キャンペーン接触、労働党支持、回答者の欧州統合への評価が有意であった。「自由民主 vs 棄権」は、年齢層、キャンペーン接触、保守党支持(-)、回答者の欧州統合への評価(p<.1), f11(文化的保守性因子。マイナスなのでリベラル因子と考えられ

る)が有意であった。「Brexit 対棄権」では、キャンペーン接触、保守党支持、Brexit 支持、欧州統合への評価(-)が有意だった、Brexit はもちろんのこと、係数はその半分であるが「保守党に近い」という有権者で Brexit への投票率が上がっているのは興味深い。⁽¹⁶⁾ 続いて、Margins パッケージを用いたシミュレーションにより、他の条件を一定にしたうえでいくつかの変数の値を変化させた際に、従属変数の選択確率がどれだけ変化するか図示した。年代が上がるほど強かったのが Brexit である。労働党と棄権は若者において強い (Fig. 2-22a)。二大政党は教育年限が長くなるほど得票率が上がり、低学歴層で弱かった。低学歴層は Brexit や棄権に流れている。ただし、高学歴層は Brexit でこそ大きく下がっているものの、各政党および棄権の確率がそれほど大きく変わらない (Fig. 2-11b)。

おわりに

2019年下院総選挙がボリス・ジョンソンの勝利に終わった時点で、本稿が直接の対象としていた政治状況は過去のものとなったと云わざるを得まいが、過去から現在に向かう一里塚として記録する意味はそれ自体としてあると思われるし、少なくとも最低限現在までの文脈の中に位置づけておく必要はあるだろう。欧州議会選挙は前任のテリーザ・メイが離脱をめぐる国内の同意調達ロセスに難航している時期の2019年5月23日、保守党にとって強い逆風の中で実施された。現実の経過としては、翌24日、メイは離脱交渉の行き詰まりの責任をとって首相および保守党党首辞任を表明⁽¹⁷⁾、翌6月7日に

(16) 「近さを感じる政党」には一つしか答えられない。複数回答であれば両方に答えているであろう回答者が一定数いたものと考えられる。あるいは、普段の下院選挙であれば保守党にアイデンティファイしており、投票する有権者が、今回は Brexit に投票したということであろう。

(17) 3月27日の1922年委員会の席上、その時点で予定されていた下院での意向投票が終われば、それが同意されようが否決されようが、離脱交渉におけるその次の重要な決定には、党首=首相として関与しない(すなわち辞任する)、という意向を伝えていたとされるので、欧州議会選挙での後退が党首・首相辞任の根本原因だったというわけではない。そもそもこの欧州議会選挙結果はイギリス不参加も考慮されていたし、離脱が可能にな

党首辞任のうえ、保守党党首選を勝ち抜いたジョンソンが7月24日に党首に就任するまで、党首代行として首相職に留まった (Seldon 2019)。

欧州議会選挙としては、下院における二大政党以外の中小政党、自由民主党、緑、SNP、Brexit が議席を獲得したことで、選挙制度の特性をあらためて確認したものといえよう。比例代表制にのっとって実施されるこの選挙がこのままなくなるのであれば、この選挙で幾許かの議席を確保して存在感を示すことで、議席をなかなか獲得できない下院選挙にも候補者をたてようとしてきた中小政党にとって⁽¹⁸⁾、重要な手がかりがひとつ失われることになる。スコットランドやウェールズ、アルスタに、下院より比例的な選挙制度をもつ議会が残されているが、スコットランドがイギリスの一部であり続けるかも定かではなくなった。このことは、特に伝統的に親 EU 派の自由民主党にとって深刻な問題となるかもしれない。

るなら大した意味をもたないはずであった。保守党の欧州議会選でのこの程度の敗北(前回との議席差は-4)はさほど意外な結果であったとも思われず、下院における政局に及ぼす間接的影響は、予想できるにしてもかなり複雑なものであったと思われる。それでも5月24日の党首辞任は、タイミングをはかるうえでは、この欧州議会選挙の結果が一つの要因にはなったであろう。

(18) contamination 効果の一種と考えられる。Nishikawa (2005), Guinjoan (2014)。

Reference

- Annesley, Claire, Francesca Gains, and Anna Sanders, 2019, 'Women and gender in the 2019 party manifestos', *LSE British Politics and Policy Blog*, December 2nd, 2019.
- Campbell, Rosie, 2004, 'Gender, Ideology and Issue Preference: Is There such a Thing as a Political Women's Interest in Britain?', *British Journal of Politics and International Relations*, vol.6, 20-44.
- Campbell, Rosie and Silvia Erzeel, 2018, 'Exploring Gender Differences in Support for Rightist Parties: The Role of Party and Gender Ideology', *Politics and Gender*, vol.14, 80-105.
- Fella, Stefano, Elise Uberoi, Richard Cracknell, 2019, *European Parliament Elections 2019: results and analysis*. Parliamentary Briefing Paper 8600, House of Commons Library.
- Fraile, Marta and Raul Gomez, 2017, 'Bridging the enduring gender gap in political interest in Europe: The relevance of promoting gender equality', *European Journal of Political Research*, vol.56: 601-618.
- Fieldhouse, E., J. Green, G. Evans, J. Mellon and C. Prosser 2019, British Election Study Internet Panel Wave 16., DOI: 10.15127/1.293723
- Guinjoan, Marc, 2014, *Parties, Elections and Electoral Contests: Competition and Contamination Effects*, Routledge.
- Inglehart, Ronald and Pippa Norris, 2000, 'The Development Theory of the Gender Gap: Women's and Men's Voting Behavior in Global Perspective', *International Political Science Review*, vol.21, 441-463.
- Miller, Vaughane, Arabella Lang and Jack Simson-Caird, 2017, *Brexit: how does the Article 50 process work?*, Parliamentary Briefing Paper Num. 7551, House of Commons Library.
- Nishikawa, Misa, 2005, *Mixed Electoral Systems: Contamination and its Consequences*, Palgrave Macmillan.
- Schmitt, Hermann, Sara B. Hobolt, Wouter van der Brug, and Sebastian A. Popa, 2019, *European Parliament Election Study 2019, Voter Study*.
- Seldon, Anthony, 2019, May at 10, Biteback Publishing.
- 江口哲史, 石田基広, 市川太祐, 高橋康介, 高柳慎一, 福島真太郎, 松浦健太郎, 2018, 『自然科学研究のためのR入門:再現可能なレポート執筆実践』, 共立出版。
- 高橋康介, 2018, 『再現可能性のすすめ』, 共立出版。
- 太郎丸博, 2005, 『人文・社会科学のためのカテゴリカル・データ解析入門』, ナカニシヤ出版。
- 松村優哉, 湯谷啓明, 紀ノ定保礼, 前田和寛, 2018, 『RユーザのためのRStudio[実践]入門:tidyverseによるモダンな分析フローの世界』, 技術評論社。